

## 唐寅の生涯と蘇州文壇

内山 知也

### 一 まえがき

中国は文学にまで政治意識を持ちこむ傾向の極めて強い国である。そういう傾向は現代中国にだけ顕著なのではなく、古代より文学の背負っている宿命とでも言うべきものである。そうした文学の歴史の過程において、時として王権の衰退期とか、時の政治権力に背を向けた文人たちの間に、芸術至上主義の非政治的文学、すなわち抒情、山水自然、日常の個人生活などを対象とする文学が作られることがあった。そういう時代を文学的価値の低落期と貶めるか、あるいは収穫期と称えるか、議論の別れるところである。その二通りの評価はしばしば交替して論議のまどになってきたわけであるが、文学の個性を重視する観点からすれば、いかなる時代の文学においても、個我の表白を見逃すことはできないのである。

十五世紀後半から十六世紀前半における明代蘇州文人の詩文書画は、実に日常に疲れ切った吾人の心を甦らせるに十分余りあるほど高度に洗練された芸術である。私はその芸術家の中でも沈周・文徵明・唐寅・祝允明・楊循吉たち数人の詩文集を読み、なにがしかの数量の書画を——それを僅かの実物を除いては画集に縮尺された印

画を——見たに過ぎないのであるが、蘇州という富裕な江南の都会に住む芸術家の赤裸な生活と友情、洗練された詩文と交際、中国美術史においても一きわ輝かしい光彩を放つ書画の制作、こういう営みを温く包みこむ蘇州の自然と人情の美しさ、そういったものに何とも言えず心を引かれてきた。そういう気持で見ると、中国人の故郷に繋がる觀念と、文学芸術との関わりが、この時代のこの土地ほど密接にからみ合い高く昇華されたことはなかったのではないかと私には思われてくる。優しい郷土の中に在って、すぐれた先輩友人と交わり、芸術をそのまま生きてゆくという生活こそ、長く中国人があこがれ求めた世界であつたはずだからである。

私は、いまその中の一人として、極めて個人的で、奔放な性格のゆえに、悲惨と屈辱の生涯を送つた芸術家唐寅をあげ、彼の生涯と彼を抱擁する蘇州文壇との關係を概観してみたい。そこには、門閥も財力もない一人の俊才が、同郷人の交際を手づるとして必死に生きてゆくさまが窺えるし、彼の成功と失敗に関しては、同郷人の畏敬と蔑視、愛と憎しみがつきまとつてゆき、やがて彼の死後には、愛すべき人間として一篇の小説にまで語り継がれて行く。そういう唐寅に私は心を牽かれてならないのである。

## 二 蘇州の風土・文化と文人

明の袁宏道（一五六八—一六一〇）が、蘇州出身の二人の二流文人の詩集のために書いた序文がここにある。<sup>(2)</sup>それは唐寅たちの時代の蘇州文壇を、次の世代の一流の文学者が、客観的に評価した資料として見ると、ずいぶん興味深いものである。それは詩文を中心とした評価であり、当時流行の古文辞派への批判の気持も含まれているから、一種の偏向性とも言うべき性質がないわけではないが、明初より明末万暦年間に及ぶ蘇州文壇を概観している所に捨て難い意義がある。次にその文章を掲げよう。以下（ ）内は私の加えた蛇足である。

蘇郡の文物は一時に甲たり。弘（弘治）（孝宗の年号）一四八八—一五〇五・正（正徳）（武宗の年号）一五〇六—一二の間に至り、才藝代出し、斌斌<sup>びんびん</sup>として極盛と称し、詞林は天下の五（中央）に当る。その後、昌穀（徐禎卿一四七九—一五一

一) 少しく呉の歛<sup>うゑ</sup>を變じ、元美(王世貞一五二六—九〇)兄弟繼いで作り、高く自ら標榜し、務めて大言壯語を為し、吳中綺靡の習、之に因つて一變す。而して剽竊風を成し、万口譽を一にし、詩道疲弱なり。今に至るまで、市賈の傭兒も、争つて謳吟を為し、遞ひに相ひ臨摹す。人の一語の格を出る<sup>い</sup>るあり、或いは句法の実実かつて見し所の者に非ざれば、則ち極めて之を誣<sup>そ</sup>り、野路の詩と為す。その実、一字も觀<sup>み</sup>ざることに双眼漆<sup>しつ</sup>せるが如く、眼前幾んど爛熟<sup>らんじく</sup>せる故実に則り、雷全翻復せるは、殊に穢を厭ふべし。故に余の往きて吳に在るや、濟南(李攀竜・辺貢ら濟南歷城出身の古文辭派の人たち)の一派、その呵斥を極む。而して賞識する所は、皆吳中前輩の詩篇なり。後生の甚しくは推重せざる者、高季迪(高啓一三三六—七四)而上は論なし。功名を事とするを以てして而も詩文清警なる者あり。姚少師(姚広孝一三三五—一四一八)徐武功(徐有貞一四〇七—七二)これなり。銛辭と命意(寓意)と、欲する所に随つて言ひ、むしろ弱やかにして縛せらるるなき者は吳文定(吳寛一四三五—一五〇四)王文格(王鏊一四五〇—一五二四)これなり。氣高才逸<sup>いきたかさいいつ</sup>れ、羈<sup>き</sup>に就かず、詩は曠<sup>くわう</sup>らかにして文なる者は、洞庭の(吳興の洞庭を指す)蔡羽(一五一四—一五四)これなり。王・李(王世貞・李攀竜)の擯斥する所とならず、而も識見議論卓<sup>たつ</sup>れて觀るべきあり、一時の文人之を望んで、その崖際を見ざる者は、武進の唐荊川(唐順之、一五〇七—一六〇〇)これなり。文詞甚しくは奥古ならずと雖も、然も自ら戸牖<sup>こ</sup>を開き、またよく言はんと欲する所を言ふ者は、崑山の帰震川(帰有光一五〇五—一五七二)これなり。半ばは時に趨<sup>おもむ</sup>き、半ばは古を学び、立意造詞、時として己の見を出す者は、黃五岳(黃省曾一四九〇—一五四〇)皇甫百泉(皇甫汈一四九七—一五八二)これなり。画苑と書法と、一時に精絶し、詩文の長ぜるも、之に因りて掩はれし者は、沈石田(沈周一四二七—一五〇九)唐伯虎(唐寅一四七〇—一五二三)祝希哲(祝允明一四六〇—一五二六)文徵仲(文徵明一四七〇—一五五九)これなり。その他、名を知らずして詩文の觀るべき者甚だ多し。大抵、慶(隆慶)穆(穆宗)の年号(一五六七—一五七二)齊(萬曆)神宗の年号(一五七二—一六二六)以前は、吳中の詩を為る者、人おのの詩を為るが故に、その病靡弱に止まる。而れどもその為に伝ふべきを書はず。慶曆以後、吳中詩を作る者は、共に一詩を作る。共に一詩を為れば、これ詩家の奴僕なり。その伝ふべきや否やは、吾得て知らざるなり。ままた二のやや自ら振拔せる者あり。彼の中の人士を見るごとに、皆之を細<sup>そ</sup>り笑ふ。幼にして小生に学び、先輩を貶<sup>おとし</sup>すること尤だ多し。その由る所を揅るに、徐禎卿(王世貞)二公、まことにこれが俑<sup>も</sup>を為す。然れども二公は才もまた高く、学もまた博し。昌穀(徐禎卿)をして中道にして天せず、元美(王世貞)をして于鱗(李攀竜)の毒に中らざらしめば、就るところまさに此に止まらざるべし。今の詩を為る者、才は既に綿薄、学もまた孤陋、時論の毒

に中ること、また彼よりも深し。詩いづくんぞいよいよ卑<sup>ひ</sup>からざるを得んや。(下略)

この長い叙述を多少補足充塙して蘇州文壇の発展と性質を要約すると、大体こういうことが言えるのではない。すなわち、十四世紀後半の元末明初における高啓・楊基、張羽、徐賁、王行らのいわゆる北郭の十友といわれた文人グループの成立を蘇州文壇の第一期とすれば、第二期は十五世紀後半、吳寛や王鏊が中央の高官となり、文章を以て館閣に領袖となった時代、それに呼応するように沈周・祝允明・文林・楊循吉・桑悦らが一時期を画したときである。その時に引続いて、十六世紀前半には、文林の子文徵明・唐寅・蔡羽・黃省曾・袁孝<sup>ちつ</sup>・皇甫兄弟が現われる。それを第三期とすれば、第四期は文徵明を先輩とし、王寵・陸師道・陳道復・王穀祥・彭年・周天球・錢穀らの輩出する十六世紀後半である。

第二期の文人たちが輩出したころ、十五世紀後半の蘇州城内の繁栄を、王鏊(一四三二—一九九)は「寓園雜記」<sup>(3)</sup>にこう描写している。

吳中はもとより繁華と号せしも、張氏(張士誠)の拠りてより、大兵の臨む所、屠戮せられずと雖も、人民遷徙して、三都の戎<sup>き</sup>に突<sup>つ</sup>てられ、遠方の者相ひ繼いで至り、當舖もまた教坊に隸す。道里蕭然、生計鮮薄、過ぎる者感を増せり。正統(英宗の年号一四三六—一四九二)天順(重祚した英宗の年号一四五七—一六四四)の間、余嘗て城に入りしに、咸な謂ふ、「稍くその旧に復せり」と。然れどもなほいまだ盛ならざりしなり。成化(憲宗の年号一四六五—一五二一)の間に逮<sup>いた</sup>び、余凡そ三、四年に一たび入り、則ちその迥かに異境のごときを見、以て今に至る。親美日に増し、閭閻輻輳し、棹楔<sup>たうせ</sup>林叢す。城隅濠股には、宮館布列して、ほぼ隙地なく、輿馬從蓋、壺觴<sup>こしやう</sup>櫛<sup>くし</sup>盒<sup>こくわ</sup>、こもこも通衢に馳す。永巷の中、光彩日に耀く。山に遊ばんとする舫<sup>ふね</sup>、妓を載する舟、魚は緑波を貫く。朱閣の間、糸竹謳歌し、市声と相ひ雜はる。凡そ上貢の錦衣、文具花菓、珍羞奇異の物、歳に益す所あり。刻糸累漆の風、浙宋より以来、その藝久しく靡<sup>すた</sup>れしも、今は皆精妙なり。人の性は巧みにして、物産いよいよ多く、人材の輩出するに至っては、尤も冠絶と為す。作者は専ら古文を尚び、書は必ず篆隸。兩漢の域に襲<sup>しん</sup>たりて、下は唐宋に逮<sup>いた</sup>び、いまだ必ずしも此より先んぜず。固より氣運然らしむるも、実は朝廷の休養生息の恩に由るなり。人生此を見る、また何ぞ幸なるかな。

この記録は、蘇州が、十四世紀後半から約一世紀の間、張士誠（三二一—六七）の反明の根拠地であったことを理由に、特別苛酷な重税が課せられ、極度の疲弊状態にあった時期を経過し、そのために受けた文化的衰退が、租税等の軽減措置を得られるようになったことよって、正統年間より経済的發展に伴って次第に回復し、さらに空前の活気を取りもどしたこと。多くの文人が現われ、文は古文、書は篆隸を尚ぶ文壇の氣風があったことを記しているのである。

しかし、この時代に及んで蘇州文人たちがみな共通に富裕であつたわけではない。蘇州府志や吳県志、明史を見て、必ずしも出身は明瞭というわけではないが、太ざつぱに言つて、第二期の文人には三つの出身類型があるように思われる。第一は、沈周のように大地主階級の出身で、豊かな家庭に育ち、先祖や親族の中にすぐれた文人を持ち、書籍芸術品の所蔵も多く、物心両面にわたつて芸術を堪能できた人。第二は、吳寛や王鏊のように科挙を突破して中央の高官となるか、或は楊循吉のように中下級の官僚となつて活躍した後、政治的事情などによつて退官し、故郷に引退した人たち。彼らの家庭はもと官僚の家から相当な経済力のあつた家、または貧しい家などさまざまである。第三に、唐寅や張靈に代表されるような庶民階級の出身で、落第と貧窮のために苦難の生涯を送つた人たちである。

これらの文人はまた主に、次に掲げるような蘇州城内の喧騒の中で生活してゐた。乾隆吳県志<sup>(4)</sup>には、

城中は東西に分治す。西は東に較べて喧鬧なり。居民の大半は工技にして、金閶（西の北部にある門）の一带は比戸貿易す。負郭は則ち牙儔（仲買人）輳集し、胥・盤（西の南部と、西南隅の門）の内は府県治に密邇し、衙役廝養多し。而して詩書の族、廬を聚めて錯処し、閭に近きが尤も多し。城中の婦女は刺繡に習ひ、浜湖近山の小民は、最も畜耕漁に力むるの外、男も婦も並に摺履（わらぐつ）をしめたく、緝麻（麻を裂く）、織布、織席、采石、造器に工みにして生を営む。梓人（大工の棟梁）、鑿工、罌工、石工は終年外境に傭せられ、早く官課を弁せんことを謀る。

と記録しているように、手工業者、商人たちがひしめいて暮らしている町内に、あちこち散在していたのであつた。

さてそうした蘇州でも、地域によって人々の気質に相違があったことを、同じく乾隆吳県志は記録している。

今の元和（元和県。清代の蘇州城内は、呉・長洲・元和三県に分れた）は昔の長洲なり。昔の長洲は古の呉会なり。風氣習俗大約甚しくは相ひ違からず。然れども之を細分すれば即ち一城の内もまた各々同じからず。婁・葑（蘇州城の東側の二門）は東南に偏し、その人多く儉嗇にして田産を儲ぐ。胥門（北の門）は職業を勤め、經紀に習ひ、敢て放逸の行を為さず。盤門は地僻野なり、其の人多く貧しく、畚野に類す。閶・胥は地闊閶（市の道路多くして、四方百貨の集まる所、仕宦・冠蓋の経る所なり。其の人の見る所の者多く、習ふ所の者奢れり。拘鄙謹曲の風少くして、侈靡宕佚の俗多し。

さてわが唐寅をこの蘇州城内呉県の呉趨坊に置いてみると、そこは閶門の近くで四方から商人が集まり、官人文人たちの往来する、ぜいたくで放肆な繁華街だったのである。

唐寅と反して、長洲県生まれの沈周や文徵明は、その家柄もあろうか極めておっとりとした人柄であった。そういう差異もいくらかは蘇州城内の地域的性格から生じているらしい。同じく乾隆吳県志には、

東城の人は、或いは貿易し或いは治産し、大概家を作すに勤め、煩費に吝なり。西城に在る者は、貿易多くして治産少く、華美を好んで儉嗇を羞づ。故に長・元（清代長洲県と元和県。すなわち明代長洲県）の富者は真実多く、呉邑の富者は浮夸多し。人はただ閶・胥の間に百貨叢集し、急公治私、咄嗟にして弁ずるを見るも、其の十室に九は空しく、多く客資を藉りて、以て豪華を為すを知らず。真に余りあるに非ざるなり。故に長・元の富者は数世に亘りて絶せず。而るに呉邑の富者は或いは易世にして貧しく、或いは身に及んで尽き、昨は百万と称するも、今は遂に立錫も地なき者あるも、蓋し長久の計を知らざるによるなり。

と両県民性の差異を述べている。まさに唐寅こそは、商売でせうせと稼いだ親の財産を、数年でみごとに飲みつぶした遊蕩の芸術家、あっぱれ呉県民の代表者と言えるのである。

### 三 唐寅の生涯と芸術

唐寅の詩文集には、明の万曆四十年序刊「唐伯虎集」（沈思編、内閣文庫蔵本）、万曆四十二年刊「唐伯虎先生全集」（何大成編、学生書局歴代画家詩文集景印本）、嘉慶六年序刊「六如居士全集」（唐仲冕編、これに依拠する景印、或いは鉛印本に漢声出版社本、水牛出版社本、宏業書局本がある）の諸本がある。それらに一応眼を通してみると、何れも一長一短があり、古いものほど採録漏れがあり、かつ版本によって文字の異同がある。私は最初何大成本を読んでいたが、あまりに編集がごたごたして速成の憾があった。ところが唐仲冕本は整理が行き届いており、近刊のものには句読まで付いていて便利であった。

又、唐寅の年譜については、民国三十六年楊静齋の「唐寅年譜」（大西洋集刊之九、大西洋圖書公司、民国五十九年刊）が極めて詳細である。江兆申教授はさらに溫肇桐の「唐伯虎先生年表」を底本として「唐寅的年譜」（江兆申著「關於唐寅的研究」所収）を作り、特に書画の制作年代を明らかにする所が多い。

唐寅の生涯とその芸術についての專著は、寡聞にして江兆申教授の「關於唐寅的研究」（民国六十五年六月、台北、国立故宫博物院刊、図版共二四六頁）と T. C. Lai 氏の「T'ang Yin」（一九七一年六月、香港刊）だけにしか近年刊のものに接していない。江教授の著述は、唐寅の境遇、師友との遭遇、旅行と詩文の各章にわたって詳細な考証によつて的確な判断を下し、また故宫博物院所蔵の書画などを翻検して、全集に未収の題画詩一一一首、尺牘二則を補った外、唐寅画の特色、変化の過程、複本と偽作、周臣画との比較に論及する労作である。

こうした先人の年譜に基づいて、唐寅の生涯と芸術との関係を考察してゆくが、特に吳県人としての彼の性格と郷土との関連に注目したいと思う。

## (1) 唐寅の家庭と青年時代(三十歳まで)

## ——官僚志向の夢と挫折——

唐寅は明の憲宗の成化六年庚寅(一四七〇)二月四日(陽曆三月二日)蘇州府吳縣吳趨里に生まれた。彼には後に七歳若い弟申字は子重という人と、二人の中間の年ごろに一人の妹が生まれることになる。父は広徳といい、吳趨里で酒館の類の飲食業を生計としていた。吳趨里のあたりは閶門に近く各地の商人や文人たちの集まる繁華街だったから、相当な収入があったのだろう。その先祖は前涼王朝(三二一—三七六存立)の陵江將軍唐輝で、晋昌郡(甘肅省安西県)に住んでいた人と信じられていたらしい。唐寅は題面の署名にしばしば「晋昌唐寅」と記しているのは、この先祖を誇りとしていた証拠である。さてその後裔唐俊は唐の太宗に従って功績を樹て、莒国公に封ぜられ、俊の子孫唐介は、侍御史に任ぜられていたが、宋の皇祐(一〇四九—一〇五三)年間仁宗皇帝を直諫したかどで淮南以遠に左遷され、以来一族はおちぶれて華中に住むことになった。その家系から明代に及んで土木堡の変(正統十四年一四四九)に英宗がオイラートのエッセンと戦い捕虜になった事件に戦死した兵部車駕司主事唐泰が出た。泰の子孫は南京と嘉興に別れ住んだ。唐寅たちはこの一支流であろうといわれる。<sup>(7)</sup>そして唐寅の曾祖父から父広徳に至る間の三代は、すべて一人っ子で、兄弟がなかった。<sup>(8)</sup>唐寅の一家はこのような家系に連なっている。大家族を尊ぶ中国の習わしから見ると、「孤寒」という名にふさわしい家柄だったのである。

唐寅が伯虎と字し、子畏とも字するのは、寅どし生まれだったからであり、号の六如は金剛經の偈の「一切有为の法は、夢の如く、幻の如く、泡の如く、影の如く、露の如く、また電の如し。まさにかくの如く観ずることを作すべし」という一句から採ったものである。

父広徳の寅に対する期待は極めて大きかったに違いない。商人の父はわが子の立身出世に自分の夢を托した。だんだんと聡明に育って行くわが子に、「この子はきつと有名になるだろうが、世帯持ちは悪かろう」<sup>(8)</sup>と期待と不安の入り混った推測をしていた。少年の聡明さを自慢の種にしながら、反面その行動の中にわが家業とは相容



れない素質が次第に芽生えているのを感じ取っていたのである。父の危惧はやがて事実となって現われることになるが、少年のころから軽率で耽溺する素質があり、一気に放蕩となつて家庭を崩壊に導いてゆく壮年期は、早くも察知されていた。しかし唐寅の側からすれば、官僚になるべく仕向けられた父の教育方針に対する幼い反抗であつたと見てよい。唐寅が二十五歳の時父母を相ついで失つた後も、たつた一首の「夜中思親」五律しか遺さないのは、苛酷な科擧のための勉強を自分に課した父に對して、あまり親密感を抱いていなかったのではないかと推測されるものがある。母邱氏に對しても父と同様墓誌銘、祭文など伝わっていないのである。

成化二十一年乙巳（一四八五）唐寅十六歳の時、彼は蘇州府学の生員となつた。蘇州府学は府治の南にあり、宋の范仲淹が錢氏の南園を購入して創建したもので、元を経て明代に受け継がれた由緒ある建物であつた。当然唐寅はここに入る前は呉県学に学んでいたのであろう。そして近隣の張靈らとはかねがね幼馴染であつた。張靈は字を夢晋といい、家はかねて貧困で、靈の時になつて始めて学問をやり出したといった状態だつたから、唐寅の方が少しはましだつたのである。靈は府学の生員になつて詩文に励んだが、交際好きで酒飲みの男伊達だつたら唐寅とすぐ気が合つた。虎邱の可中亭に遊び、乞食の身なりをして商人にごちそうを貰い、大いに詩詞を作つて商人たちを驚かした話は有名である。彼も唐寅同様古文辞を愛好したので、督学方誌に嫌われ出世できなかった。しかし、彼の人物画は拔群で、彼を酔っぱらわせるのでなければとても手に入り難いものだつた。また同年齡の陰曆十一月六日に生まれた文徵明は、共に府学に入りよい友人となつた。徵明の父文林（一四四五—一九九）は呉寛と同年の進士で親交があり、永嘉・博平の知県から南京太僕寺丞となり、晩年に温州知府になつた人物で、沈周に次ぐ文壇の重鎮であつた。もともと官僚や儒学者を出した文家の子徵明は、少年のころはぼんやりしてうすのろであつたらしい。しかし次第に讀書作文を学び、古文辞に長ずるところとなり、年長の楊循吉や祝允明と交際して一層力をつけ、後には呉寛にも学ぶ機会を持つたほど恵まれた家庭に育つたから、おっとりとして優しい反面、きまじめな所もあつた。それで、後には唐寅の素行不良を戒めて争いを起したりしているものの、よき理解者であつたことには違ひなかつた。唐寅はこの父子に親交を結んだ。祝允明（一四六〇—一五二六）は十歳年長で

あったため、もう少し後になつて親密になつた。唐寅は似通つて放逸な性格があり、生涯親交を結んで離れなかつた。祝允明の父輩は無名の人物だが、祖父顯は給事中より山西布政司右參政に昇つた高官であり、かつ母は兵部尚書華蓋殿大学士徐有貞の娘であつたから、允明も文徵明に劣らない名門の子弟であつた。

唐寅はこうしたすぐれた友人先輩を持つことができた。この頃、彼が泮池（府学のめぐりのクリーク）にとびこんで張璽と水合戦をやつてあばれたという逸話は、いかにも商人の子弟らしく自由活発な少年時代を送つていたことを想像させる。

成化二十二年丙午（一四八六）十七歳の時、唐寅は初めて「貞寿図卷」を画いた。それに呉一鵬<sup>(13)</sup>（一四六〇—一五四二）が題署して「歳丙午、子畏止かに十七。而るに山石樹枝は篆籀の如く、人物衣褶は鉄糸の如し、少くしてかくのごときに詣る。あに天授にあらざるや」と称讃した。一鵬は後に礼部侍郎から尚書、南京吏部尚書といつた大官になる人物だが、弘治六年（一四九四）の進士だから、当時はまだ無冠の書生だったのである。唐寅は沈周の画を学んだが、それが何歳ごろかということは、彼の若い時代の作品が伝わらない為に証明されていない。しかし三十歳ころの作品には沈周の影響が著しく認められ、三十歳から三十六歳ころの絵にはさらに周臣<sup>(14)</sup>（一四五三—一五三五）の影響が現われる。

成化二十三年丁未（一四八七）十八歳の時、唐寅は沈周の画「洞庭東山王鏊壑舟園図」<sup>(15)</sup>に五言古詩一首を題した。鏊は王鏊の従兄で、この年に洞庭の東山の岩山の間に別荘を作り、舟のように天井をしつらえたのでこの名をつけた、と王鏊の「壑舟園記」に記す。唐寅と共に題署している人は、まず李旻<sup>(16)</sup>（一一五〇—一五〇九）。錢塘の人、成化二十年進士第一の合格者。修撰、国子祭酒を終て吏部侍郎となり、正徳四年卒<sup>(17)</sup>がいるが、進士に合格したばかりで、エリートコースに就いた気鋭の官人であつた。次に姚公綬（不明）、次に楊廷和<sup>(18)</sup>（一四五九—一五二九）。新都の人。十九歳で父に先だつて成化十四年進士に合格。庶吉士より檢討を授けられた。後に太子太師華蓋殿大学士となる<sup>(19)</sup>がいる。おそらく檢討くらいに居たのであろう。次に費宏<sup>(18)</sup>（一四六八—一五三五）。鉛山の人、成化二十三年の進士第一。修撰を授けられ、正徳年間に戸部尚書となつた。寧王宸濠の交際を拒絶。楊廷和の後を受けて宰相となり、張璁らに謀られて一時退官。の

ちに官に復した<sup>(19)</sup>が在るが、進士に合格したばかりであった。次に楊循吉<sup>(19)</sup>(一四五八—一五四六。呉県の人。成化二十年の進士。礼部主事を授けられたが、弘治初年に退官して、三十一歳の身で支硎山下に隠棲した)がある。循吉は礼部主事であり文名が高かったが、二年後には退官して故郷に帰る身であった。次に蔣冕<sup>(20)</sup>(一四六三—一五三三。全州の人。成化二十三年の進士。庶吉士から編修となり、正徳年間に戸部尚書となった)が在る。進士に合格したばかりであった。次に沈翼<sup>(?)</sup>。同名の沈翼は山陽の人。宣徳五年の進士。南京戸部尚書となったが天順元年致仕、六十六歳で死んでいるので、この沈翼ではない)が在る。これら七名の連名者は二人の不明者を除外してすべて高官になるか文人として有名になった人物であったが、どうやら席の中心に在って巾を利かせていたのは蘇州の先輩楊循吉らしいことが見えてくる。十八歳の唐寅はおそらくこうした若い俊才の間に挟まれて鞠躬如としていたことであろう。楊循吉は頗(さちが)い主事というあだなを奉られるほど喜びの感情を隠すことのできない人だった。何か嬉しい事があると手足を振っておどったという逸話が明史の伝に伝わっている。

一方この会において画を描いた沈周は六十一歳、その画名は天下に轟いていた。

弘治元年戊申(一四八八)十九歳の時、唐寅は最初の妻徐氏と結婚した。徐氏は父徐廷瑞と母呉氏の間に生まれた三人娘のうちの次女であった。母呉氏は生涯紡績ばかりやっていたと唐寅自身が彼女の墓誌銘<sup>(21)</sup>に書いているから、あまり身分のある家でもなさそうである。二人の仲は睦まじかったが、六年の結婚生活の後弘治七年に死亡した。

弘治四年辛亥(一四九二)二十二歳の時、唐寅は秀才劉嘉のために墓誌銘<sup>(22)</sup>を書いた。劉は唐寅の幼馴染で、二十四歳の若さで幼児を遺して死んだのである。勤勉で貧しい若者は、初めは元稹白居易の詩風を、後には齊梁の詩風を愛したという。寅は「義は則ち朋友なるも、情はなほ骨肉のごとし」と記して若い先輩の死を悲しんでいる。

弘治六年癸丑(一四九三)二十四歳の唐寅は沈誠(一四二四—一九三)のために墓碣を書いた。誠は字を文実、号を希明、味業居士といい、長洲県の人で、孤高な学者であった。賢良に挙げられたけれども合格せず、不遇のうちに

一生を終えた。寅はその病中親しく見舞に行っているから、或いは寅の師であった人かもしれない。死ぬ前に著述をすべて焼却してしまい、友生門徒は誠の名が後に伝わらないことを哀しんだという。

この年の晩秋、父広徳と妻と子が死んだ。<sup>(24)</sup>

弘治七年甲寅（一四九四）唐寅二十五歳。春先きに唐寅は妹を嫁がせた。すると間もなく母が死に、嫁ぎ先で妹が自殺した。<sup>(25)</sup>その原因は何であったかわからない。寅自身この痛恨事について何も書き遺していないのは不思議である。この年大洪水があり、地上に水五尺、沿江の者は一丈に及び、多くの溺死者が出たという災害のあと、疫病にでもかかって総倒れになったのだらうか。ただ五言古詩「夜中思親」の形式的な詩があるが、これは少し後の作品らしく思われるし、「傷内」の詩は妻の死を秋景色の中にあつて嘆いている。何れも死因に関するようなことには触れていない。

この惨状は当然唐寅に打撃を与えたと思われるのに、意外にも彼はあつさりとその危機を脱した。祝允明は「唐子畏墓誌銘」に「父没するも、子畏なほ落落たり」とその当時の唐寅の無感動ぶりを記しているくらいだから、よほど諦めるにふさわしいような状況があつたか、あるいはこのころ既に彼の放蕩無頼の生活が始まつたのか。これも推測の域を出ないのである。

弘治八年乙卯（一四九五）二十六歳の八月、許天錫の妻高貞字は閑徳という二十九歳で死んだ女性のために墓誌銘を書いた。許天錫<sup>(27)</sup>（一四六一—一五〇八）は閩県の人で、弘治六年の進士である。後に吏科給事中となり、正徳の初めに安南に使い、都給事中となつたが、宦官劉瑾の悪状を暴露し、自ら首を縊つて自殺したと伝えられる烈士であつた。

この秋も深いころ、鸚鵡臯に登り、桂香亭に遊び「桂香亭図」巻を描いた。<sup>(28)</sup>また彼は鏡の中に自分の白髪を發見し、五言古詩「白髪」を作つた。彼は壮年のうちに功名を建てなければならないとし、「君子言行を重んじ、努力以て自私せん」と結んでいるが、白居易の「初見白髪」<sup>(29)</sup>ほどの実感性に乏しく、大げさで観念的な作品である。この詩に対して、五十歳の文林は「和唐寅白髪」を作り、人の寿命には長短の定めがあり、悲しむに及ばな

い。ただ一層勉強すべきであると慰めている。

この頃であろうか文徵明は「飲子畏小樓」<sup>(30)</sup>五言古詩一首を作り、阜橋の傍らの唐寅の小樓に遊びに行き、樓一杯の古書に囲まれながら楽しくたそがれ時まで酒を飲んで過した様子を歌っている。また、十二月二十日、文徵明は唐寅から「東觀餘論」を借用し<sup>(31)</sup>その書後に題した。「東觀餘論」は宋の黃伯思の撰した法帖題跋とその考証を記した書物である。すでに唐寅の学問は書の方面にも及んでいたのである。

弘治九年丙辰（二四九〇）親の喪に服している間に郷試の期日（弘治八年）は過ぎていった。唐寅の生活は乱れに乱れた。すでに祝允明は弘治五年に合格、十二歳年長の友人都穆（二四五八—一五二五）も昨年合格した<sup>(32)</sup>。唐寅は隣家の狂生張璽と酒に耽り、諸生の学業を怠った。彼の詩名は揚っていたのに、立身の機会は空しく過ぎて行つた。焦燥感に駆られた唐寅は、福建省興化県の九鯉湖に旅し、その湖のほとりの九仙祠に祈禱した。すると夜の夢に、祠の神が現われ、彼に墨一万丁を授けた夢を見た。彼はそれを将来自分が貧しい儒者著述家になる夢知らせと判断し、官僚になることが自分の希望なのだから、あてになるものかとうそぶいた<sup>(33)</sup>。しかし、彼はついに官僚にはなれず、生涯画家となつて墨との縁は尽きなかった。九仙祠の神のお告げは無惨にも適中していたのであつた。

また、五月から九月過ぎまで開封に旅して道中の名勝風物を書いて来た友人袁臣器の「中州覽勝」のために序を書いた<sup>(34)</sup>。袁臣器は名を肅<sup>き</sup>といい臣器は字である。若いころから学問に励んだが、家業が日増しに落ち目になるので、弟の竊<sup>ひそ</sup>と力を併せて家業を盛んにし、母趙氏に孝養を尽した。人の苦境を救つてやる反面、失敗には容れせず面と向つて批判したので、方斎と呼ばれた。崑山医学訓科になったが、やめてから里社を組織し、月に二度集まつて雅歌投壺の会を催した。おだやかでおくゆかしい人柄の人物であつた<sup>(35)</sup>。

弘治十年丁巳（二四九七）唐寅二十八歳。この頃すでに九歳年下の徐禎卿（二四七九—一五二一）との交際が始まつていた。徐は呉県の出身で、稀に見る俊才であつた。弘治十四年、二十二歳で郷試に合格、同十八年には二十六歳で進士に合格して将来を嘱望されたが、容貌が醜かつた為に殿試に受からず、一度雨遊した後、大理寺左寺副

に任ぜられた。しかし無頼少年と交際して囚人を逃亡させてしまった罪で国子博士に貶せられた。彼は唐寅の紹介で沈周・楊循吉らの文壇に参加することができた。そして祝允明・唐寅・文徵明とあわせて呉中四子と呼ばれた。その詩風も初めは白居易・劉禹錫を好んだが、進士及第後は漢魏盛唐の古文辞派に傾いていった。未完の大器として世を去ったのである。ともあれ、この年、祝允明の文選の跋書の後に、楊循吉が跋を書き、その後に「徐禎卿」と禎卿が署名し、唐寅は「唐寅披玩」と題する<sup>(37)</sup>。かつて唐寅が楊循吉の傍にいたように、今は徐禎卿が新しい世代の代表者として蘇州文壇の仲間入りをしていたのである。

弘治十一年戊午（一四九八）唐寅は二十九歳となった。この春文林が温州知府となつて赴任するのを虎邱で楊循吉・沈周らと送別した<sup>(38)</sup>。待望の郷試が実施される年が来た。しかしながら、あいにくなことに、中央から蘇州に試験の巡察にやってきた提学監察御史方誌という人は、今流行の古文辞の大嫌いな人であつた。当時県学や府学の生員は試験前に必ず提学による試験すなわち科考を受けなければならなかつた。それに合格して初めて郷試受験の資格を認められたのであつた。唐寅と張靈は府学の生員で、土地がらもあつて古文辞愛好派だつたから、提学方誌の名を聞いてすっかり萎れてしまった。それでも唐寅は張靈を「君はまだ名を知られていないから、がっかりすることはないよ」と慰めた。張靈は「竜王が尾のある魚を殺すぞと言えば、鼯も恐れて泣き出す、という話を知らないのですか」と答えた<sup>(39)</sup>という。当然唐寅は落第した。しかし沈周を畏敬していた蘇州知府曹鳳（二四五七—一五〇九）の推薦（遺録）でやつと受験資格を得たのであつた。彼がこういう機会を得たというのも蘇州文壇の力によるものであることは疑いもない。

唐寅は南京に赴き、郷試の試験を受け首席（解元）で合格した。主任試験官（座主）梁儲（二四五一—一五二七）は彼の答案の文章のすばらしさを中央に帰つてから礼部侍郎程敏政に告げたほどであつた。あまり深刻な受験勉強もしなかつたのに解元合格を果した唐寅の驚喜の程は推測に難くない。というのは、彼が自分の書画印に「南京解元」の印を捺すのは、この時の感動と誇を露骨に表現したものととれるからである。彼は一層調子に乗つて明年の中央試験に臨み、官界に打つて出ることになった。

文徵明は哀れにもこの試験に落第した。父の文林は任地の温州からわが子に手紙をやってこう慰めたという。「唐寅ほどの才能があれば当然合格してもいいだろう。しかし彼は軽薄だから将来はうまくいかないよ。お前は将来大成するんだから、唐寅などの及ぶところではないんだ」と。文林は唐寅の才能のよき理解者ではあった。どう身びいきに見ても才気の点で劣る徵明ではあった。それで父親文林はわが子を将来に期待した。それがこの場において徵明を励ますのにふさわしいと考えたのである。

年末、江陰県の舉人徐経と同船して北京に行き、明春の会試に備えた。徐経は江陰県の富裕な大地主であつた。

弘治十二年己未（一四九九）は唐寅の運命を決定した最悪の年であつた。三十歳の彼は喜びの絶頂から絶望屈辱の深淵へと突き落されてしまったのである。彼は生涯この日の恥辱にさいなまれて生きなければならなくなつた。彼を絶望に陥れた事件は、会試の試験問題漏洩事件であり、その背後には政界の暗闘がわだかまっていた、遂に真相が解明されないうちに処分が行われてしまったのであつた。

二月、唐寅と徐経は会試を受験し、二十七日二場の後、給事中華景は、主考官礼部侍郎程敏政が場題を漏洩したと劾奏した。その結果三月七日、給事中華景、舉人徐経と唐寅はともに獄に入れられてしまった。雷礼の「列卿記」によると、この年の主考官は李東陽と程敏政であつた。出題は敏政が担当することになり、元の劉因（一四九一—一九三）の「退斎記」から出題されたが、この書物はまだ誰にも知られていないものだった。にもかかわらず、敏政の門生で馴染の徐経だけがふだんこれを知っていて、唐寅にそれを喋つたために事が起つた。二人はうまく答案が書けた（と思つた）ために、自慢して吹聴した。こうした軽率な唐寅らの態度は世論を沸騰させ、給事中中華景は敏政が試験問題を売つて賄賂をとつたと劾奏した。礼部尚書徐瓊がそれに間知したのだから、次官の敏政としてはその処理に難渋した。それで「以前から試験問題を用意しておいたのを、下男に盗み売られました」と申し開きして、試験答案を開封して調べてみて、設問の出所を知っているような人はすべて落第にすることになった。合格者発表の後に給事中林廷玉はこう上疏した。「敏政が賄賂を受けたといつても、指摘するほど

の事實はなく、自ら下男が盗み売ったと言っているが、その事實のほどは疑わしい」と。しかしやがて詔勅により、敏政は経らと共に投獄された。そして判決は次のように下された。「徐経は日常物品を敏政に贈っており、敏政もそれを受けて門下生としての出入りを許していた。敏政は早くから問題を準備していたから、下男が盗み出すことも可能だった。よって程敏政は免官、徐経と唐寅は黜けて吏とする——と」。

さらに「史乘考誤」<sup>(43)</sup>は、「焦芳は孝宗実録を編集してこう言っている。傅瀚(二四三—一五〇二。当時礼部侍郎で、十三年に徐瓊に代つて礼部尚書となつた)<sup>(44)</sup>が禍を程敏政に転嫁し、後でその地位についたのだ。當時は劉健(二四三—一五二六)が国権を握っていたが、怒りに狂つて真偽の判断ができなかった。あたかも大学士謝遷(二四四—一五三二)と諭德王華は、敏政に怨恨を抱いており、しかも都御史閔珪(二四三〇—一五一二)と遷及び華は同郷人だったから手をまわし、内外力を併せて攻撃を加え、疑獄事件をでっちあげたのである。華景のような手先は言うに足りない者だ。——と。また王世貞は「傅瀚に程敏政を陥れようという腹があつたことは人も知るところである。下男が試験問題を漏したことはもはや明らかであるが、劉健と謝遷には関係がない。おそらく焦芳は李賢の門人で、敏政が李賢の婿であつた関係上、敏政の非を隱弊したのでらう。そして劉健と焦芳とは仲が悪かつたので、ついにこんな悪口を言つたのである」——と」。

唐寅の莫逆の友都穆はこの時に進士に合格したが、高官に名の売れた寅に嫉妬し、この事の中傷したという説<sup>(45)</sup>があり、それがどうやら蘇州の人々に信ぜられ、二人の仲を永遠に悪いものにしてしまった。江兆申教授は「上京中、唐寅は徐経に金の面倒を見てもらつていた。困苦に耐えて教師生活が続けてきた十二歳年長の都穆は唐寅の金をあてにしていた。もし唐寅が気ままの上に得意げな顔をしていたら、都穆の心中は果してどんな気持ちだつたらう。応酬の場で、人々が唐寅に高官と交際があるのを心から祝っている時、都穆は彼らが試験問題を予想しているのを前もって知っていると誤解して、口から出まかせに話したのだ。しかしその時、敏政の背後に傅瀚がいようとは全く知らなかつたし、彼の心中の鬱憤が華景<sup>ちやうけい</sup>の劾奏の根拠にならうとは思つてもいなかつた」<sup>(46)</sup>とこの間の事情を説明している。



ともかく、この事件の背景は陰湿で、科挙制度にまつわる人間関係の症状も悪化していた。三月七日投獄され、四月二十二日に苛酷を極めた訊問があり、六月一日に判決が下り、「贖徒」(罰金刑)となった。金を支払った後は「吏」に馳けられる判奏を受け、故郷に帰ったのであった。

六如居士の号はこの頃用いられたであろうと江教授は指摘している。<sup>(47)</sup>唐寅はこの衝撃から無常観を身に着けたのであった。

故郷の人たちは、彼の生活難を見かねて、彼に浙江の吏の職につくようにすすめた。しかし唐寅はそれを拒絶し、学問研究に従事しようと決心した。彼は絶望を紛らわそうと酒を飲み、妓にたわむれて暮した。その為第二の妻は離縁し、生活はどん底に落ちることになる。

この十二月、朱性甫という人が驢馬を買うために友人間から募金した時に、唐寅は金がなく、「蕉刻歲時懽」一部十冊を売り、一兩五錢の銀を手に入れ、それを援助した。<sup>(48)</sup>失意と窮乏の中にありながら、唐寅の親切さは驚くばかりである。唐寅の保釈金も或いは蘇州文壇の人々の募金でまかなわれたのではないかと私はこの事から逆に推測するのである。

この年、唐寅の良き理解者だった文林は温州で死んだ。

## (2) 壮年時代(三十一歳より没年に至る)

——芸術家としての生涯——

唐寅の人生はこの年をもって一変する。すでに再び進士の試験を受けてエリート官僚への道をたどることが不可能になった現在、貧書生が何にすがって生きるかという問題が彼の肩のしかかっていた。

弘治十三年庚申(一五〇〇)三十一歳。官界に入る望みの断たれた唐寅は、絵画に心を潜めた。江教授によれば、この頃周臣に画を学んだ。周臣は呉県の人で字は舜卿、号は東邨。唐寅より二十歳年長で沈周と同輩の画家であった。後に唐寅は自分が忙しくて間にあわなくなると、周臣に代筆を頼んだという話<sup>(49)</sup>が伝わっている。江教授は

偶然といった程度の出来事で、そうやたらにはありえないとこの説を否定しているが、当時の画家の世界では、例えば沈周がそうであったように、自分の絵を模倣した弟子の絵に、平気で師匠自ら署名することがあったし、又有名になった弟子の注文を受けて師匠が代作するといった逆現象もあり得たのではなからうか。彼等芸術家の世界では一芸に秀でさえすれば師弟の間は極めて親密で、互助の觀念が常に働いていたのだらうと思う。それがこの時代のこの土地柄だったのであるうと考える。

彼の生活はますます困窮し、嫉妬ぶかい第二番目の妻を離縁した。この妻の姓名は不明である。彼の文徵明に与えた書簡には、この頃の窮状を余す所なく述べている。

ここに經由する所、惨毒万状なり。眉目親を改め、愧色面に満つ。衣焦げて仲ばすべからず、屢欠けて納るべからず。僮僕案に抛り、夫妻反目す。もと獐狗あり、門に当りて噬む。室中を反視すれば、（50）顧（へん）破欠し、衣履の外、長物あるなし。

そして新しく生きる路を模索するにも、まず先だつ生活費を文徵明に仰いだのである。

このころの唐寅の荒亡ぶりを描いた逸話が明末の項元汴（一五二五—九〇）の「蕉窗雜錄」に見える。

唐寅は釈放されてから、蘇州で画舫に乗った美女を見染めた。そこで身なりを変え、小舟を備へて女の後をつけて行つた。呉興県まで行くと、そこはある役人の家であつた。彼は毎日のようにその門前を通り、いかにも落魄した格好をして、雇つて欲しいと頼みこんだ。彼は二人の子供の家庭教師として住みこむことになり、子供たちの文章力は日まじに上達していった。勿論彼が有名な唐寅であるとは誰も知らなかった。やがて、結婚するために郷里に帰りたいとかまを掛けて申し出ると、子供たちは承知せず、「家の女中で気に入ったのがいたらあげるから行かないで下さい」と頼むのだった。早速彼は目当ての女中秋香が欲しいと言うと、子供たちは父親に申し入れて結婚の許可を貰つた。結婚式の夜、秋香は「あなたは前に蘇州で逢つたお方ではなかったかしら。士人なのになぜこんなに身を落していらっしゃるのですか」と尋ねる。唐寅は「お前があの時私の方をふり向いてくれたからさ。それが忘れられなかったんだ。」「私は前に若者があなたをとり巻いて白扇に面を描いてほしいと頼んでいる所を見たことがあります。あなたはすらすらと流れるようにお書きに

なり、酒を飲んで楽しそうにお叫びになり、あたりの人にも気をかけず、私の舟の方をじっと見ておいででした。私はあなたが並のお方でないと思い、ついニッコリ笑ったのです。」「何という女性なんだろうあなたは。こんな境遇にいて僕のことを理解できるなんて。」と語りあった。そうこうしているうちに、主人の家に貴賓の訪問があった。主人は唐寅に客の接待をさせたところ、客は唐寅に向つて「君はなんと唐寅に似ているね」と言つた。唐寅は「そうですとも、僕はこの家の女に惚れてここへやって来たんですもの。」と答えた。客が主人にそれを伝えたものだから、主人はびっくりして唐寅を客席に据えて歓待した。そして翌日、百金の仕度を調べ、秋香と共に呉に送り還した。

この物語は唐寅が没してから三十数年しか経たないうちに作られたもので、それが何大成の万曆丁未（一六〇七）刊本の外編に収められ、尹守衡（万曆十五年壬午（一五八二）の進士）の「史竊」列伝七十二唐寅伝の中に収録されて、もはや実話と信じられるようになってしまった。そしてさらに明末の馮夢竜（一五七四—一六四六）の短篇白話小説集「警世通言」巻二十六の「唐解元一笑姻缘」や、抱甕老人の「今古奇観」第三十三回の「唐解元玩世出奇」の物語へと発展していった。今「明季四傑唐祝文周全伝」（不肖生著）と称する通俗読物があり、自序によると、蘇州彈詞で語られた「八美图」「三笑姻缘」「換空箱」の三部を白話に書き改めたものである。本来ならば政治に携わるべき有能な四人の才子も、寧王宸濠のような野心家の巾をきかせている世の中では、ただ「明哲保身」によって自己の安全を求めるしか手はなかった、と述べ、上述のエピソードを粉色し、祝允明・文徵明・周文賓の三人を交えて面白おかしく全編七十二回の章回小説にまとめている。

こうした小説は、唐寅の性向を伝えているが、事実とは異っている。

弘治十四年辛酉（一五〇一）三十二歳の春ごろ、唐寅は病床に臥ることがあった。徐禎卿は「簡伯虎」の詩を贈り、その尾聯に「心期兀兀として幽病を成すも、誰か高人のために草屢を弁ぜん」と慰めた。禎卿はこの年郷試に合格したのであった。江氏年譜によれば「效白太傳自詠」三首はこの春の作であると。

維摩病に臥して鬚髮を餘し、

李白長流して室家を棄つ。

案上の酒盃こそまことに故旧、  
手中の経卷生涯を漫る。(第一首)

弘治十六年癸亥（一五〇三）三十四歳。

昨年九月、黄志淳のために風木図を描き、葉汝川に贈っている（虚齋名画録）から、すでに唐寅は画家として売画の生活之余儀なくされていたのである。しかし彼は極端に頹廢的生活を送っていたため、これまで生活を支えていた弟唐申に別居を強いられるはめに陥った。

彼の周囲には遊び好きの先輩祝允明や友人の張璽がいた。礼法を物ともせぬ野放図な芸術家連中は、美妓や酒に薙屈した思いを晴らしていた。「失題」八首その第一首に見える情欲の率直な肯定、

一簾の瓊漿死生を托し、

佳人才子自ら多情。

世間多少ぞ無情の者、

枕席の深情葉の軽きに比するは。

また「寄妓」の思慕の情、

兩地に相思して望迢迢たり、

清淚風に臨んで布袍に落つ。

楊柳の曉烟 情緒乱れ、

梨花の暮雨 夢魂銷ゆ。

雲は楚館を籠めて金屋虚しく、

鳳は巫山に入りて玉簫を奏す。

明日河橋 重ねて回首せば、

月明千里 故人遙かならん。

これらの詩は、彼の偽りのない心情であった。

温雅な文徵明は落魄したこのころの唐寅の様子を同情を以て歌っている。「簡子長」<sup>(32)</sup>の詩に、

落魄迂疎 家を事とせず、

郎君の性気 豪華に属す。

高楼に大叫す 秋鴈の月、

深睡に微酣し 夜花を擁す。

坐るに端人をして阮籍かと疑はしむるも、

いまだ文士の劉叉と目すべからず。<sup>(33)</sup>

ただまさに郡郭に声名あれば、

門外時に長者の車を停むべし。

と歌い、「夜坐聞雨」<sup>(34)</sup>の詩には、貧窮絶望の詩人に心からの同情を歌っている。

皐橋の南畔の唐居士、

一榻の秋風病眠を擁す。

用世すでに銷ゆ横槩の気、

謀身いまだ弁せず買山の錢。

鏡中影を顧れば驚空しく舞ひ、

檻下に長鳴して驥自ら憐れむ。

正にこれ君を憶ふも冷を奈ともするなし、

蕭然たる寒雨窓前に落つ。

弘治十七年甲子（一五〇四）三十五歳の唐寅は、なお売文売画と飲酒遊興の生活を送っていた。六如居士外集所収の「白醉瑣言」には、次のような話がある。「唐寅と祝允明が揚州に遊んだ時、路銀が足りなくなり、蘇州玄

妙観改修の勸進道士に紛装し、塩使者から二百金をだまし取った。後に使者は蘇州に行き調べた。工事の痕跡は全然なかったが、二人の身元もわかったので、名誉のため不問に付した。楊譜はこのエピソードをこの年に置いているが、特に根拠はない。

江氏年譜には、この年、唐寅が王鏊のお供をして林屋洞の側に名を題したとある。林屋洞は呉県の洞庭西山にある洞穴で、道教十大洞天の第九番に当る霊所である。唐寅は「燒葉図」や「採藥帰来図」のような道教的風俗を描いているし、九仙祠に祈禱しているから全くの道教嫌いではないと思われるが、焼煉術（錬金術）のような一種の詐術は大嫌いであつたことが「説圃識餘」に載っている。

弘治十八年乙丑（一五〇五）三十六歳。この年、徐禎卿は進士に合格して唐寅の果せなかった夢を見事に実現した。二月には琴師楊季静の金陵に旅するに当り、「南遊図」を画いた。楊季静を描いた絵に「琴士図」があり、描線がいかに生き生きとして美しい。晩春には沈周の「落花詩」に文徵明・徐禎卿・呂秉之と共に和韻の詩を作った。彼は三十首も作り、連作としては最多である。その第三十に、

花朶風に憑まがせて意こころを着けて吹かれ、

春光我を棄あきらめてて竟ついにに遺あきらすがごとし。

五更の飛夢は巫峽を環めぐり、

九腕の招魂は楚詞を費す。

衰老の形骸は昔日なきも、

凋零の草木は榮はなく時あり。

和詩三十 愁千万、

此の意東君知るや知らずや。

と歌い、連作に苦吟したことを自白している。

沈周の、「大家準備す明年の酒／慚愧す重ねて看るはこれ老人なるを」（第二十二首）とか「怪しむなかれ留連三

十咏／老父傷むところ人の知ること少し」(第二十九首)といった衰老回顧感傷の想いを叙するのが主体となつてゐるのに対する唐寅の詩調は、蘇州の晩春の哀愁溢れる風情と無情観である。文徵明の「和答石田先生落花十首」(90)の場合はかえつて妖艷でさえある。第六首に、

桃蹊李径 緑叢を成し、

春事飄零して落紅に付す。

恨みず佳人の再び得がたきを、

縁つて知る色相の本来空なるを。

舞筵の意態は飛飛たる燕、

禪榻の情懷は裊裊たる風。

蝶使蜂媒すべて懶慢たり、

一番の無味 夕陽の中。

九月、唐寅は徽州歙県と休寧県に旅行し、真冬に蘇州に帰つてきた。かの地で、彼は徽州の王友格のために「王氏沢富祠堂記」を、歙県の呉明道に「竹斎記」を、新安の洪伯周のために「愛谿記」を、休寧県の齊雲山に登つて「齊雲巖縦目」の詩、「齊雲巖紫霄宮元帝碑銘」「齊雲巖聯句詩」を作つた。前の三篇などは明らかに売文の意図が感じられ。行くさきさきで文人や僧道と交わり、詩文を作つて旅費を得ていたのである。

この年、唐寅と文徵明の仲は険悪となり、殆ど絶交寸前の状態に陥つた。唐寅が文徵明に与えた書簡は現在二通しか文集には見られず、文徵明から唐寅への書簡は伝わらないから、寅の文章から逆に推測するしか方法はないが、「答文徵明書」(91)を見ると、きつと先に唐寅が徵明に無礼を働き、文徵明がそれを非難した手紙を書いた、そのことに對する反撥めいた内容である。

正徳元年丙寅(一五〇六)三十七歳。この年王鏊(一四五〇—一五二四)は呉県における父の喪があけ、吏部侍郎に拝せられて上京する。そのさい、唐寅は「王濟之(鏊の字)出山図」の跋文を書いた。(92)中央に入った王鏊は劉健ら

と共に、劉瑾ら八人の悪宦官（八虎と呼ばれた）を誅殺するように上奏するが、すっかり宦官に淫楽の遊びを仕込まれた武宗には決断の能力があらう筈はなく、あえなく王鏊らの国政刷新は失敗に帰してしまった。結果的に隱健派の李東陽は大学士から少師兼太子太師に、王鏊は吏部尚書兼翰林学士から戸部尚書文淵閣大学士にと格上げされ、政治の実権から遠却けられてしまったのであった。唐寅はその王鏊の為に「王公拜相図」巻を描き、沛県歌風台に奉陪して「歌風台感古並序」を作った。同時に実景画は茂化学士に贈られた。この正月には「華山図」を画き、三月穀雨の日に「七言律詩軸」を書いた。

六如居士外集に典故不明の説話がある。この年、唐寅はある親しい人に水墨で桃と杏の二枝を扇に描いてやり、暇を見て新たに詞を作って題画しようと思っていた。ところが、その人は持ち去った後、ばか書生に大書させてしまった。唐寅はこれを見てひどく怒り、墨で真黒に塗りつぶしてしまった。その時楊儀（後に礼部の役人になる人物）は十九歳の若者だったが、机の傍にいて、水筆で洗ひ、書生の筆跡をほとんど消したところで、長相思の詞を補填して書いたので、唐寅は大に褒めちぎった、という。芸術家として充実した創作活動を続けていたこのころの唐寅の姿が窺える説話である。

正徳二年丁卯（一五〇七）。三十八歳の唐寅は、蘇州府城内の北辺に位置する桃花塢に、桃花庵及び夢墨亭を築いた。彼が芸術家として独立する自信を得たのがこの時であると私は考える。彼の生まれた呉趨坊の家は、父が酒館を経営して繁昌した場所であり、小楼や書斎もあって、唐寅の起居に不自由はなかったはずであった。しかし彼の耽溺生活は、すでに先年弟とかまどを別にする、という当時の中国の風習では不幸な生活を招くことになっていた。今こうして新しい土地を得たことは、彼の経済的独立を意味し、文人としての収入もかなり多くなっていたと思われる。にもかかわらず彼は多くの友人に借金を申し込んだらしい。後輩の徐禎卿にもぬけ目なく救いの手を求めたことは前述のとおりである。「困った時はお互い様」といった風潮が通用していたのである。祝允明は「夢墨亭記」に「四方より帰る比、亭を閭門の桃花塢中に結び、之を目して夢墨と曰ふ。神符を章らかにするなり」と、夢墨亭建立が九鯉湖の神に祈禱して得た墨にちなんでいることを述べている。唐寅はここに落着



き、七言古詩「桃花庵歌」、五言律詩「桃花庵与祝允明黄雲沈周同賦五首」、七言律詩「桃花庵与希哲諸子同賦三首」<sup>(67)</sup>「桃花塢祓禊」などの詩を作った。「桃花庵歌」には悠々脱俗の気分を歌い、少しも疑う所がない。

桃花塢裏の桃花庵、

桃花庵裏の桃花仙。

桃花仙人は桃樹を植ゑ、

又桃花を摘んで酒錢に換ふ。

酒醒めてはただ花前に在りて坐し、

酒酔ひてはまた来りて花下に眠る。

半醒半酔 日また日、

花落ち花開き 年また年。

ただ願はくは老いて花と酒の間に死せん、

車馬の前に鞠躬するを願はず。

車塵馬足 貴者趨き、

酒箋花枝 貧者縁る。

もし富貴をもつて貧者に比ぶれば、

一は平地に在り一は天に在り。

もし貧賤をもつて車馬に比ぶれば、

他は驅馳するを得 我は間を得。

別人我を笑ふて風顛かと忖がふも、

我は他人の看<sup>み</sup>不<sup>ふ</sup>穿<sup>けぬ</sup>を笑ふ。

見ずや五陵豪傑の墓、

花なく酒なく鋤<sup>く</sup>かれて田となるを。

この三月、唐寅は「嵩山十景」<sup>(68)</sup>画冊を描いた。また「秋林月上図」<sup>(69)</sup>を画いた。

正徳三年戊辰（一五〇八）唐寅三十九歳の時の六月、弟唐申の子長民が十二歳で死んだ。唐寅には男子がなく、この長民だけが唐氏の男子であつた。唐寅の期待はすべてこの子に繫つていた。この類利な少年が死んだことをまるで自分のせいか、天のまちがいのように思つて「……あに余が凶窮まり悪極まり、世の徳を敗壞し、而して天まさにその宗を翦<sup>た</sup>んとするや。而れども余は束髮<sup>た</sup>を行ひ、壺漿<sup>た</sup>豆羹<sup>た</sup>にも、兄弟歡怡<sup>た</sup>し、口に謗言<sup>た</sup>なく、行に詭随<sup>た</sup>せず。仰いで白日を見、下先人を見るも、衷<sup>た</sup>に忝<sup>た</sup>しきことなきに、昊天聰<sup>た</sup>からず、吾が猶子<sup>た</sup>を喪<sup>た</sup>ぼす。誠に善を為すも微なし。ああ冤<sup>た</sup>なるかな。ああ痛ましいかな。（下略）<sup>(70)</sup>」と号泣したのであつた。

八月、唐寅は詩の弟子戴昭との別れに「垂虹別意」の詩及び図を書いた。垂虹とは呉県の地名である。この序を書いたのが長洲吳出身の紹興府儒学訓導戴冠で、この送別会に参集した人が何と沈周・楊循吉・祝允明を始めとして、謝表・吳竜・文璧・陳鍵・仇復・練同惠・陳儀・朱侗・陵稷・徐子立・黄紋・浦礪・俞符・練全璧・魯参・祝統・俞金・釈德璇・邢参・周同人・朱存理・応祥・陸南・顧桐・欽遵・王俸らの有名無名の文人たちであつた。戴冠（二四四—一五一一）は字を章甫といい、王恕や李東陽に認められた学者であつた。弘治初年に紹興府訓導になつたが、やめて長洲に帰り、正徳七年に七十一歳で没した。礼記集説弁疑・濯纓亭筆記など多数の著述を持つ埋もれた学者であつた。戴昭という人物については明らかでないが、これだけの文人を集め得たのだから蘇州では相当知られた人物だったのであろう。

この年も「陽山欲雪図」「林屋洞図」「夏山欲雨図」「山居風雨図」など作画活動が盛んであつた。<sup>(72)</sup>

正徳四年己巳（一五〇九）唐寅は四十歳を迎えた。彼は「四十自寿」の画を描き、それに自ら七律一首を題した。絵の構図はまがりくねつた松、すくすくと伸びた竹、泉石清流の中に小さな茅屋があり、室内に高士が端座する。<sup>(73)</sup>「四十自寿」の画に自ら描いた詩は次の如くである。

魚羹稻粥 好く身を終へ、

彈指流年 四旬に到る。

善もまた為すに懶きに何ぞ況んや悪をや、

富は望む所に非ず 貧も憂へず。

僧房の一局 金藤著く、

野店の三杯 石凍る春。

自ら不才を恨むもまた自ら慶す、

平生無事太平の人。

この詩は何大成本と唐仲冕本とは異同があり、殊に頸尾兩連の違ひは著しく、「山房一局金藤着、野店千栳石凍春。如此福縁消不尽、平生無事太平人。」となつてゐる。又「平生無事」を「平生落魄」に作る本もあり、唐寅自身好んでしばしば書いた詩と思われる。

清河書画舫には唐寅がこの年校書宗讓の為に描いた「野望憫言」図巻のいわれについて記してゐる。それによると、この絵はこの年の呉の洪水見舞に宗讓に贈られたものであつて、それから七十六年を経て（万曆十三年・一五八五）今の所持者施若係に伝わつたものであると。そしてその図巻を見た張伯起（名は鳳翼、長洲縣人、嘉靖四十三年の舉人。紅拂記等の伝奇の作者で、海内名家工画能事などの著書多数がある）は「其れ天真爛漫、逸趣宛然として、一段蕭疏清曠の氣、煙波柳岸の間に出没し、人をして応接暇あらざらしむ。たとへ當丘（宋の李成）・北苑（宋の董源）・松雪翁（趙孟頫）意を極めて之を為るとも、また自ら遠からざらんや。真に神筆なり。顧つて其の詩は、往々自ら一家の語を成し、唐人の篇什に比するも類せずと為すのみ」と言つて稱揚したと伝えている。唐寅が長洲相城里の宗讓の家に洪水見舞に行つたのは九月十五日過ぎで、王鏊のお供をして、八月二日に八十三歳で天寿を全うした沈周の弔問に行つたあとに立寄り、宴半ばで画と五言古詩を作つたのであつた。

その他、盛桃渚五十七歳の寿のために、沈周・仇英・文徵明・周臣と合作の「桃渚図巻」を作り、また「桃渚先生玩鶴図」を描いた。四月には「竹鏹図」、九月二十日には陳頤の「盆石菖蒲」に詩と跋を、その他「梅花図」を作つた。詩には「贈文学朱君別号簡庵詩」がある。朱簡庵は名は泰、莆田縣の人で、この年蘇州儒学から崇府長史に昇任したのであつた。

正徳五年庚午（一五一〇）唐寅四十一歳。

唐寅は、王世貞の友人張獻翼の祖父のために「賓鶴図」を描いた。<sup>(81)</sup>

正徳六年辛未（一五一二）唐寅四十二歳。徐禎卿は三十三歳の若さで死んだ。文徵明は「祭徐昌穀文」<sup>(82)</sup>を書き、その死を哀しんでいるのに、六如居士全集には何も伝わっていない。四月に「仿宋人闘茶図軸」を描き、「鶯々像図」の模写に「過秦樓」「二犯水仙花二闕」の詞を題した。<sup>(83)</sup>

正徳七年壬申（一五一三）唐寅四十三歳。この頃、蘇州の人、劉纓（一四四二—一五三三）のために「女兒嬌」という牡丹の図を描いた。劉は正徳五年南京刑部尚書に任ぜられたから、墨緣彙觀録には「劉都憲」と纓を呼ぶ。纓はこのころ衰老を理由にしばしば辞職を願っている<sup>(84)</sup>ので、故郷に帰り、唐寅もその家に出入して美しい牡丹を見ることのできたのであろう。

五月十五日、日本人重直彦九郎の帰国にさいし、忽々の別れに詩を作って贈った。平凡社「書道全集」一七にみえるこの書は美しい。彦九郎はその詩によると二度目の帰国であつたらしい。日比野丈夫氏の解説によれば堺あたりの日明貿易に従事する商人と考えられている。重直というのは小さく右上隔に書き添えられたもので諱であろうという。序と詩に

彦九郎日本に還る。詩を作りて之に餞す。座間に筆を走らすれば、甚だ工ならざるなり。

萍踪兩度 中華に到り、

国に帰って憑<sup>よ</sup>って踐歴をもつて誇らんとす。

劍珮丁年 帝殿に朝し、

星辰午夜 仙槎を払ふ。

驪歌送別す三年の客、

鯨海遙やかに征く万里の家。

此の行倘し重來の便あらば、

琅玕一朶の花を折るを煩はさん。

とあり、二十歳ぐらゐの帯剣した蠟燭たる若者で、武宗に朝貢した人のように見える。この訪問は突然であり、短時間に作詩が要求されたらしい。書体の整つて美しいのに反して詩は失律の嫌があり、堀の字のつくりを「風」と誤記している点があるのは、決して酔いや怠惰のせいではない。文人唐寅の名声は日本人の間にも高く、訪問依頼の客が極めて多かったことを示唆しているのである。

同じく五月既望の日、盧襄（四八一—一五三一）が寅の「野望閑言」図巻に題した。襄は呉県の人、嘉靖二年の進士で、兵部郎中、陝西右参議となり、五塢山人と号したが、当時、三十一歳の気鋭の文人であつた。九月には「山静日長」図冊を作つた。

正徳八年癸酉（五一三）唐寅四十四歳。弘治十八年（三十六歳）の時から文徵明と何となく不仲になつていた唐寅は、ここに至つて全面的修好の書簡「又与徵仲書」を送つた。四十歳の時に「桃渚図巻」合作の試みがあるから文壇人としての交際はあつたのだから、個人的交誼は断絶していたと思われる。この書簡は自分の性格の欠点を認め、長い間の交際を赤裸に叙述したあと、芸術家としての誇りを認めさせる代りに、徵明の学問人格の優位を認めることが主旨になつてゐる。

寅、文先生徵仲と交はること三十年。その始めや非<sup>ひ</sup>くして儒衣なりき。先の太僕（文林）寅の俊雅なるを愛し、必ず成るあるを謂<sup>い</sup>ひ、毎に良燕<sup>つね</sup>ごとに、必ず呼んで之を共にせしむ。爾後太僕奄謝し、徵仲寅と共に場屋に在り、郷御史の謗に遭ふ。徵仲その間を周旋し、寅領解するを得たり。北して京師に至るに、朋友に名の盛なるを相忌む者あり。排して之を陥る。人敢て一氣も出さざるに、その非を指目す。徵仲突つて之を斥く。家弟寅と炊を異にすること久し。寅、徵仲の自ら家に処するを視るや、今良に兄弟たり。人得て問つべからず。寅つねに口過を以て貴介に忤<sup>さ</sup>ひ、つねに好飲を以て鳩罰に遭ふ。つねに声色花鳥を以て罪戾に觸る。徵仲貴介に遇ふや、飲酒や声色や花鳥や、泊乎としてそれ無心にして、而も断その中に在るあり。前に万変すと雖も、動かすべからざる者あり。昔、項橐は七歳にして孔子の師となり、顔路は孔子より長ずること十歳なり。寅、徵仲より長ずること十たび月を閑せり。願はくは孔子に例ひ、徵仲を以て師となさん。詞伏

にあらず、蓋し心伏なり。詩と画と、寅、徵仲と衡を争ふを得たり。その学行に至つては、寅まさに面を捧げて走らんとす。寅、徵仲を師とし、ただ一隅を求めて共に坐し、以てその渣滓の心を消鎔せんことを求むるのみ。矯矯以て異をなすに非ざるなり。然りと雖も、また後生の小子をして、前輩の規矩<sup>ききう</sup>半<sup>はん</sup>度を欽仰せしめば、徵仲よ辞すべからず。

文徵明はいかにも良家の子弟らしくおつとりと無欲恬淡として成長した。唐寅や張璪は商人貧家に生まれたせいか、軽薄な所が多く、徵明のそうしたきまじめさをからかったようで、逸話が遺つてゐる。項元汴（一五二五—九〇）の「蕉窗雜錄」には、唐寅と祝允明が文徵明と竹堂寺に遊び、遊女たちに言いふくめて文徵明に戯れさせ困らせたという話とか、唐寅が妓女をつれて石湖に行き、あらかじめ船中に隠しておいて、文徵明を舟に乗せ、突然女たちを出して酒をすすめさせた。困惑した徵明は悲鳴をあげて湖中にとびこもうとしたという話がある。

「絶口して道学を談せざるも、謹言潔行、いまだかつて一たびも身を有過の地に置かず」（文嘉撰「先君行略」）といわれたまじめ人間文徵明をよほど困らせ、対面をつぶしたに違いないのである。こうした復交の後、二人はそれほど親しく交際した形跡が見られないというのが江教授の指摘である。<sup>(88)</sup> おそらく文徵明の氣持が容易に打ち解けないうちに過ぎてしまったのであらう。

この年、吳県知果<sup>か</sup>烱のために画と詩を贈つた。<sup>(89)</sup> また四月二十六日、「雲槎図」を描いた。雲槎とはこの横長の絵の中央の岩上に腰をおろして一人静かに濠下<sup>わが</sup>の清流をみつめている人物である。<sup>(90)</sup> 五月、「倦繡圖」を画いた。正徳九年甲戌（一五一四）唐寅は四十五歳となった。もはや榮達への夢はすっかり忘れてしまったと思われた時、秋の頃になって、寧王朱宸濠の篤い招聘に応じて江西に旅立ち、廬山・鄱陽湖に遊びつつ南昌に至つた。この招きは蘇州文壇にも届いたらしい。謹嚴な文徵明はそれを拒絶している。文嘉撰「先君行略」には、「寧藩人を遣はし、厚礼を以て来聘す。公その使を峻却す。同時の呉の人、頗る往く者あり。公曰く『あに為す所かくの如くにして、よく藩服に安んずる者あらんや』と。人殊に以て然りとなさず。寧藩の叛逆するに及んで、人始めて公の遠識に服す」と記している。唐寅はとかくの悪評高い王族の所に出かけて行つたのである。彼はそこで何がしかの官位俸禄を得たわけではなく、寧王と肌の合わないことを知り、狂人を装つてようやく脱出することができ

たのであった。「上寧王」の詩には当時の心境が歌われている。

口に信せて吟じ成す四韻の詩、  
自家から計較す誰に和つて説かんと。

白頭またよし花朵を簪するも、

明月将ひ難し酒卮を照すを。

一日の間を得るは無量の福、

千年の調を倣して人の癡を笑ふ。

是非満目紛紛たるの事、

我に如何を問ふも総て知らず。

また、蔣一葵の「堯山堂外紀」<sup>(93)</sup>には「……既に至れば処るに別館を以てし、之を待すること甚だ厚し。六如居ること半年餘、その為す所を見るに、多く不法なり。その後には必ず反せんことを知り、遂に佯り狂して以て処る。宸濠人を遣はして物を饋る。則ち傀儡形箕踞し、使者を譏呵す。使者反命す。宸濠曰く、『孰れか唐生を賢なりと謂ふ。ただ一狂生のみ』と。遂に之を帰らしむ。」と記す。

寧王宸濠は正徳二年に内官梁安を北京に派遣し、時の権力者宦官劉瑾に金銀二万を献じ、南昌左衛を護衛に改めてもらい、鬱勃たる野望を抱いていた。そして術士李自然や李日芳の言葉を信じ、自分には天子の気があると称し、独立王国を築こうと考えた。正徳八年九月、巡視江西右僉都御史王哲は宸濠の宴会に招待されたが、帰宅すると急死し、毒殺の噂が流れた。この年の四月、ついに護衛屯田が与えられ、宸濠は一種の諸侯のような形勢になってきた。六月には百余人の劇盗を役所に入れ、「把勢」と称して護衛兵とし、八月「宗族が儀賓・点検・校尉を選出する為に費用がかかることを理由にして民衆の財産を索め、横暴をほしいままにしている。そういう宗族を懲罰し、反省のない者は私に征討させてほしい」と朝廷に申し出て褒められた。こうなればいつでも宗族を懲らしめるといふ理由をつけて謀叛を起こすことが可能になったのである。

この旅行の過程において、焦山に登って五律「遊焦山」七律「焦山」を、廬山では七律「廬山」を作り、鄱陽湖を渡って南昌に入った。南昌では宸濠に期待されて厚遇を受けたものの、何の献策も追従も言えないために、次第に冷遇に変わったようである。ここで「送陶大癡分教撫州序」を作って南昌司訓より撫州崇仁県教諭に転任する陶大癡に贈ったりした。その他、「荷蓮橋記」は進賢県の橋梁完成を祝って書かれたものである。「許旌陽鉄柱記」は二つの場合が考えられる。一つは南昌府城内の鉄柱宮という道観に記された可能性である。大明一統志卷四九南昌府の「鉄柱宮」の項に、「宮前に井あり、水黒色なり。その深さ測るなし。江水とあい消長す。鉄柱その中に立つ。相い伝ふ、晋の許真君の鑄する所、以て蛟の害を息むる者なり」と。元の呉全節の詩に、『八索縦横地脈に維ぎ、一泓の消長江流を定む』とある。もう一つは府城の南の鉄柱と称する遺跡に記された可能性である。同書同卷「鉄柱」の項に、「府城の南に在り。許旌陽既に蛟蜃を斬り、謂へらく贛江は百怪叢居し、後害を為さんことを慮ると、及ち鉄柱二を鑄る。一は子城の南に在り。廬ぐに鉄索を以てし、以て蟹穴を鎮む」とある。そのいづれかに題されたのであろう。

正徳十年乙亥（一五一五）唐寅は南昌で四十六歳の正月を迎えた。二月中旬、錦峰上人の山房に遊び「梅枝図」を描き、七絶一首を作って贈った。南昌を脱出した唐寅は贛江から信江、富春江を経て浙江の廬桐県の嚴陵瀨を通り、蘇州に帰った。それは九月初であつたろう。嚴陵瀨を通った時、「過嚴瀨」の詩を作った。

漢皇の故人魚を釣りし磯、

魚磯昔より世人非ふ。

青松山に満ち櫛斧響き、

白舸落日 客衣を晒す。

眠牛立馬 誰家か牧せる、

鷗鵲鷗鷺 無数に飛ぶ。

ああ余漂泊して饑粥に随ひ、



渺渺たる江湖何れの所にか帰せん。

この詩は、ここに光武帝と同学だった嚴光が世を避けて隠遁した故事を想い起しながら、生計のために宸濠の招きに応じ、志を得ないで故郷に帰るわが身の不安さを詠じている。

故郷に帰った唐寅の心情はどのようなであったか。徐応雷が「唐家園懷子畏」<sup>(95)</sup>五首の第四首に

漫りに千金の聘に応じ、

笑って千金の装を擲つ。

空手故園に帰れば、

正に菊花の黄なるに値ふ。

と歌うのは美化しすぎている観があり、本人は却ってやけくその気分であり、若い王寵らと酒を飲んでいたようだ。王寵（二四九四—一五三三）は「九日過唐伯虎飲贈歌」<sup>(95)</sup>に

唐君の磊落たる天下に無く、

高才自ら常人と殊なる。

万里を騰驤す真の竜駒、

黄金山の如きも敢ては汚らず。

秋風日は落ちて長途に嘶び、

我もまた眉を垂れて帝都を下る。

終軍錯ひに棄つ咸陽の繡、

鯨鯢水を失ひ鱗甲枯る。

天を仰ぎ剣を撃ちて歌ふこと烏鳥、

男兒落魄して日月徂く。

相い与に臂を把りて金壺を揮ひ、

満堂の賓客珊瑚を照らす。

江東落落たる偉丈夫、

千年の稽・阮呼ぶべからず、

後來の豪飲は吾が徒にあらす。

気酣にして争つて博し鼻盧を叫び、

四座<sup>さうざ</sup>を飛ばして五湖を傾く。

人生の長苦 今日楽しむ、

何ぞ錢刀を用ひ 紫朱を衣んや。

坐茵いまだ煖かならざるに 行すでに嘔る、

樂しみを取らずして須臾に窮するを得んや。

君見ずや少陵千金の軀を保たず、

辭後子細に茱萸を看しを。

とむりやりに悲哀をまぎらわしている。唐寅は南昌への旅に失敗し、王寵は落第の悲しみを抱いていたのであった。

十一月、象田社長が桃花庵を訪れたので、唐寅は廬山に遊ぶなどの詩を書いて贈った。<sup>(96)</sup>

正徳十一年丙子（一五一六）唐寅四十七歳。この年は呉県知県李経のために「山路松声」の画軸、蘇州知府徐讚の弟朝咨が金華に帰るのを送って「送徐朝咨帰金華序」<sup>(97)</sup>を書く。また長洲知県高第が来訪したのに丁度不在だったことを詫びる七律「長洲高明府過訪山莊失于迎迓作此奉謝」<sup>(98)</sup>を作り、この地の高官と交際のあったことを示している。また「吳君德潤夫婦墓表」を書いた。吳德潤は名を裕といい、府学の生員であったが、七回も試験に落第し、五十年もの受験生生活を諦めて太湖に近い郷里に帰り、富裕な生活を送り、夫婦共に生卒を同じくして六十五歳で世を去った。「温恭靖嘉、郷閭に居りては朴素廉介を以て称せらる」といった人物であった。

正徳十二年丁丑（一五一七）唐寅四十八歳。呉県知県李経が戸部主事に昇任するのを送り、七律「送李尹」を作った。十一月十五日には広福寺（楊氏年譜によれば光福鎮の光福寺）の前に宿り、七絶一首<sup>(99)</sup>

曲巷疏籬 野寺の辺、

藍橋重ねて叙す旧因縁。

一宵折り盡す平生の福、

酔うて仙花を抱いて月下に眠る。

を書いて贈った。また「溪橋策杖図」<sup>(100)</sup>「凋底驚泉図」<sup>(101)</sup>（三月作）を描いた。

正徳十三年戊寅（一五一八）唐寅四十九歳。四月に長雨が降り続き、食事にも事欠く有様となった。唐寅は八首の詩を書き、生活の資を求めた。宏業書局刊「六如居士全集」補遺にはその詩をのせ、卞永譽の「式古堂書画彙考」には「正徳戊寅四月中旬、吳郡唐寅作於七峯精舍」と題している。

### （第一首）

十朝の風雨昏迷に苦しみ、

八口の妻孥並びに飢を告ぐ。

信ずこれ老天の真に我に戯れ、

人の来りて鬚頭の詩を買ふなからしむ。

### （第二首）

書画詩文すべて工<sup>たくみ</sup>ならず、

偶然生計その中に寓す。

肯て嫌はん斗粟囊錢少きを、

また先生一日の窮を濟ふ。

### （第三首）

膝を抱き騰騰たり一巻の書、

衣に重褶なく食に魚なし。

旁人我が生を謀るの拙なるを笑ふも、

拙は生を謀るに在り楽は餘あり。

〔第四首〕

白板の門扉 紅槿の簾、

比鄰の鵝鴨 妻兒に對す。

天然の興趣は摹寫し難く、

三日煙なきも飢を覚えず。

〔第五首〕

領解す皇都第一の名、

猖披して歸臥す白茅衡。

立錐笑ふなかれ餘地なきを、

万里の江山 筆下に生ず。

〔第六首〕

青山白髮 老いて癡頑、

筆硯の生涯 食の艱きに苦しむ。

湖上の水田 人要せずとも、

誰か來りて我が画中の山を買ふ。

〔第七首〕

荒村の風雨 鳴雞を雜へ、

燎釜の朝廚 老妻に愧づ。

一枝の新竹を寫して売らんと謀れば、

市中の筍価 賤きこと泥の如し。

〔第八首〕

儒生の計を作すや太だ癡呆、

業は毛錐と硯台とに在り。

字を問ふ 昔人は皆酒を載せたり、  
詩を写すもまた望む魚を買ひ来らんことを。

ここに歌われた唐寅自身の生活苦は相当深刻なものである。売文売画の生活は彼の場合でも極めて困難だったようである。出世の道を誤って偶然に入った道ではあるが、芸術の道に楽しみと充実を感じ、生活苦を超越しているさまが歴然と見える。漸くここに至って、往年の政治志向は消え失せ、「天然の興趣」を描く芸術家に徹する喜びを歌うようになったと見られる。ところが八月に至ると、「戊寅八月十四日夜、夢草制、其中一聯」に、「天泰運を開き、感<sup>ことごと</sup>く瑤館<sup>ぎやうくわん</sup>の文章を集む。民古風に復し、大いに金陵の王氣を振ふ」と歌ったり、また七律「夢では、

二十年餘 帝郷に別れ、

夜来忽ち科場を下るを夢みたり。

雞虫の得失 心はなほだ悸<sup>おの</sup>き、

筆硯飄零して業すでに荒みたり。

分のすでに三品の料なきより、

いかにせん空しく一番の忙を惹<sup>ひ</sup>くを。

鐘声敲き破る邯鄲の景、

旧に依りて残燈半牀を照す。

と二十年前の科挙試験の夢にうなされている。若い頃のあこがれと、その為になめた苦汁は潜在意識となり、夢に浮上してくるのであった。

十月九日、唐寅の最初の妻徐氏の母が七十歳で死んだので、「徐廷瑞妻吳孺人墓志銘」を作った。生涯紡績に励み、儉約と素食を守り、仏教も信ぜず、寿命も天命と信じて疑わぬ女性であった。

正徳十四年己卯（一五一九）唐寅は五十歳になった。二月、「五十自寿図」<sup>(105)</sup>を描いた。また七律「五十詩」<sup>(106)</sup>もこの

時の詩であらう。

五十年来 鬢いまだ華ならず、  
 阿朝全盛 樂しみ涯なし。  
 子孫眼に満ち 衣は彩を裁つ、  
 賓客門に盈ち 酒は茶に当る。  
 金鼎長生の薬を煉成し、  
 来り看る江南破臘の花、  
 誕日何ぞ須<sup>もち</sup>ひん千歳を祝<sup>いの</sup>るを。  
 由来千算は洄沙に比す。

しかし領聯と頸聯の花やかさはどうだろう。とても当時の彼の現実とは思われないので、楊氏年譜では戯れの作としてゐる。それよりも、「言懷二首<sup>(108)</sup>」の第二首が最もふさわしく思われる。而してこの詩はこの年に画かれた「西州話旧図<sup>(108)</sup>」に題された詩と少しく異同がある。今は後者を掲げると、

醉舞狂歌 五十年、

花中行樂し月中に眠る。

漫<sup>まろ</sup>に勞<sup>ろう</sup>す海内名字を伝ふるを、

誰か信ぜん腰間酒錢なきを。

書本自ら懸<sup>い</sup>つ学者を称するを、

衆人疑ひて道<sup>い</sup>ふこれ神仙と。

些か工夫を倣し得る処を須<sup>もち</sup>ひて、

胸前一片の天を損はざらん。

これこそ知命の齡に達した唐寅の姿である。名声と貧困、学者でもなく神仙でもない、ただの人間でしかない自

分だが、蘇州の麗わしい自然の中に醉舞狂歌するこの自由、これは何ものにも侵されてはならない世界なのだ。これこそ芸術家の魂の拠り所である。これはどんな手段を用いても守らなければならない。画中の唐寅は狭い茅屋に三十年來偶然に会った友人西州と対座している。屋前の岩から巨樹が二本空に伸び、屋背には太湖石の巨岩と篠竹と破芭蕉のようなものが描かれている。二人はいつまでも語り尽きないように話している。「病中殊に佳興なし。草々<sup>し</sup>に意を見すのみ」と題款は結んでいるから、彼は病氣だったのだ。しかしそれにしても心のなごむ静かな絵である。

この年、王鏊は七十歳の誕生日を迎えた。王鏊は諡を文恪、号を守溪といい、文章の大家であった。その「性善論」は王守仁（陽明）の尊崇を受けるところであったし、郷試の試験官になった事もあって、彼の経学に基づく文体は受験生間の模範となり、弘治正徳年間の文体はそのために一変したと言われるほどであった。<sup>(10)</sup> 正徳元年劉瑾の横暴に堪えかね、戸部尚書文淵閣大学士の職を辞して、郷里呉県の洞庭山に住み、招隱園という別荘に日々を過していたのであった。唐寅はその門生としてしばしば行を共にしていたことは前に述べた所である。当日「柱国少傅守溪先生七十寿序」を書き、また「長松泉石図」を描きその中に太倉の張雪槎に肖像画を書き入れさせた。

五月、蘇州は一ヶ月にわたる大雨で大洪水となった。常熟県の俞野村では、迅雷震電と共に一頭の白竜と二頭の黒竜が荒れ狂い、家屋三百余戸、舟二十余隻が空中に捲き上げられ、多数の死者が発生した。<sup>(11)</sup>「西州話旧図」は細かく巧みな絵だが、手のふるえが現われていると江教授は指摘している。この年の絵画や書はどれもすばらしい。「山静日長画冊」<sup>(12)</sup>、「会琴図」<sup>(13)</sup>、「溪閣間憑」<sup>(14)</sup>画巻、「六如三絶」<sup>(15)</sup>書巻もこの年の作である。

寧王宸濠はついに六月叛乱を起したが、蘇州方面への東進の軍勢は知県たちの団結で防がれ、王守仁を主導者とする追討軍は、安慶を攻撃中で手薄になっていた南昌を占領してしまった。こうして宸濠は捕虜になり、この動乱は大して蘇州に影響を与えなかった。早く南昌から脱れた唐寅の身には追及はなかった。

この年、沈徵徳と顧翰学が禪寺に唐寅を招いて酒を振舞った。<sup>(16)</sup>唐寅はしたたかに酔い醜態を曝した。しかし唐

寅の性根はしつかりと座っていた。その席で詠じた詩は次のようである。

陶公一飯 眞報を期し、

杜老三枯 身を托さんと欲す。

今日給孤園に共に酔ひ、

古来文学の士は皆な貧なり。

就ち律句を題して行跡を紀し、

更に侯鯖を乞ひ美人を賜ふ。

公は吾が癡を道ふも吾は道を樂しむ、

朋友を知らんと要せば情の真なるを要す。

正徳十五年庚辰（一五二〇）唐寅五十一歳。

八月「落花図詠」を画き、その上に「和沈石田落花詩三十首」のうちの第一首から第十首目にあたる七律十首を題した。<sup>(119)</sup> また「桃花菴図」<sup>(120)</sup> 卷、「採蓮図」<sup>(121)</sup> 卷三幅を画いた。後者の第二幅には文彭の草書の採蓮曲が嘉靖十四

年己未に題されることになる。

武宗は寧王宸濠親征と遊樂を兼ね、昨年北京を出発して南京に至り、漸くこの八月南京を離れた。帝は北京で豹房を作つて淫楽に耽つていたのに、この旅の途中でも思う存分の快樂をむさぼつた。そのため途中の官民はこぞつてその供給奉仕に心を悩まし、疲れ果てたのであった。

正徳十六年辛巳（一五二二）唐寅五十二歳。

五月十五日「羅漢」<sup>(122)</sup> 軸を描き、同じく五月「山水」<sup>(123)</sup> 卷の四丈ほどの長大作をものした。八月には「烹茶図」<sup>(124)</sup>、九月には「山水」<sup>(125)</sup> 軸を描いた。この他に「桐菴図」<sup>(126)</sup> 卷がある。

嘉靖元年壬午（一五二二）唐寅五十三歳。

元旦に「嘉靖改元元旦作」<sup>(127)</sup> 七律一首を作った。それはまことに形式的な作品にすぎない。夏のころ呉県知県劉



伯暉が沛県知県に転任するに際して来訪したのに対し、「別劉伯暉<sup>(128)</sup>」七律一首を贈った。

一別光輝二十年、

中間の消息<sup>しやうし</sup>向つながら茫然たり。

忽ち敕命を<sup>しやうめい</sup>銜んで吳苑に來り、

貧家を過訪して暑天に値ふ。

路上の青雲 鶚<sup>おさ</sup>拳<sup>こぶし</sup>を看、

柘<sup>さく</sup>は紅燭に臨んで語<sup>ご</sup>蟬連<sup>せんでん</sup>す。

料知す別後<sup>わか</sup>忘ら<sup>わす</sup>れず相い念はん、

盡く江東日暮の烟を贈らん。

また友人鈕惟賢の依頼を受け侯生居士の寿を祝して「墨蓮<sup>(129)</sup>」を作った。五月六日には扇に書<sup>(130)</sup>を認めている。

嘉靖二年癸未（一五二三）唐寅五十四歳。

文徵明は蔡羽と共に歳貢生となり、二月二十四日蘇州を出発し、四月十九日北京に着いた。そして翰林待詔を授けられ、翰林学士楊慎・黄佐らの敬愛を受けた。徵明は嘉靖六年春まで北京に滞在し文名を揚げたのだった。

一方唐寅は病にかかっていた。死因については明らかではないが、江教授によれば肺疾であったという。その根拠に教授は「燒葉<sup>(131)</sup>」に唐寅自ら題した七律一首をあげる。すなわち、

人來りて杏を種<sup>う</sup>ゑ<sup>ゑ</sup>虚しく尋ねず、

廬山に彷彿として小径深し。

常に静中に向ひて大道に参じ、

忙裏に因りて清吟を廢せず。

願はくは化雨三春の沢に随ひ、

未だ雲閑一片の心を許さざれ。

老いたる我は近來肺疾多し、

好し紫雪を分つて煩襟を掃はん。

の尾聯二句の文字である。この作品は唐寅四十二、三歳の作品と見做されているが、この頃からすでに肺疾にかかっていた。「紫雪」とは、脚気の毒がまわり、高熱が続いた場合や、発熱のため狂燥状態になった時に服用する漢方薬である。又火傷瘡の痛みにも用いる。又「紫雪散」という薬もあり、心脾の積熱をなおす薬である。江教授は「肺疾」は咳嗽を指すと言われるが、この薬方から見るとやはり肋膜炎のような高熱を発する病気であると思われる。唐寅四十五、六歳すなわち寧王宸濠のもとから帰った後も長く患っていたらしいことは祝允明の「唐子畏墓誌」に「暫らくして帰り、まさに復び四方を踏まんとして、疾の久しきを得、少しく癒えて、稍く旧緒を治む」とあることによって推測でき、五十歳作の「西州話旧図」には「病中殊に佳興なく……」と題し、この年の四月に描いた画扇に、祝允明が「予君と三月晤はず。昨李構（浙江嘉興県）より帰るに、採薪すでに癒えたりと聞き、心始めて慰む」と題しているところから、彼の病状が慢性的なものであったことが考えられてくる。おそらくその度ごとに高熱を発する状態が続いていたのであろう。しかも四十歳以後の唐寅は創作意欲が旺盛であり、多くのすぐれた作品を産み出していたが、実はこの病と闘いながらの懸命な創作だったのである。一方彼の性格の放縱さから、飲酒放蕩と生活苦が慢性疾患を悪化させて行つたと考えられる。

この年七月、竹扇に書き、七言絶句一首を題したり、文嘉跋の詩翰冊を作つたりした。

十二月二日、唐寅は五十四歳で世を去つた。後には第三番目の妻沈氏と、王龍（一四九四—一五三三、字は履仁、のちに履吉。雅宜山人と号した。長洲県に生まれ、諸生の資格で太学に貢せられた。文徵明後の第一人者として、書画の分野でも名声が高かった。雅宜山人集十巻がある）の子国士に嫁いだ娘だけが遺つた。この時王龍はまだ三十歳の諸生にすぎないから、その子国士も十歳前後と思われるし、寅の娘も何歳であつたかわからない。後妻の沈氏のこととも不明である。遺骸は横塘の王家村に葬られた。祝允明は「唐子畏墓誌銘」を書き、また「哭子畏」二首および「再哭子畏」の詩を作つて、彼の死を悼んだ。「哭子畏」第二首に

万妄安んぞ能く一真を減ぼさん、  
六如今日すでに身なし。

周山すでに神鳳を容れず、

魯野何ぞ死麟を哭するを須ひん。

顔子道存せば天と謂ふにあらず、

子雲玄在ればあに貧と称せんや。

高才買ふに贖る紅塵の妬、

身後なほ聞く禍を樂しむの人。

と歌ったのは、不幸だった友人へのせめてもの好意であつた。「再哭子畏」の詩に、

少き日同に懷ふ天下の奇たらんことを、

中来出世せんことまた曾て期せり。

朱糸再び絶つ桐薪の韻、

黄土深く埋む玉樹の枝。

生老病餘 吾なほ在り、

去来今際 子先づ知る。

当時印せんと欲せし枢機の事、

中宵夢思に入るを解すべし。

と官途への挫折を悼んでいる。祝允明も晩年になってようやく広東興寧知県となり、しばらくして応天通判になり病気で辞職したのだった。允明は嘉靖五年に没する。おそらくこのころは彼も病み、かつて唐寅が制誥の原稿を書いた夢に胸をとどろかせたように、彼もついにかなわなかった榮譽の夢を見て醒めたのである。

唐寅の死後、その芸術と生涯を敬慕する人士は多かった。貧家に生まれ早く父を失った孤高の詩人徐応雷は、桃花庵の跡を訪ね、唐寅を偲んだ。その「唐家園懷子畏」<sup>(138)</sup>五首(前出三・四首)は死後遠くない時期の作であろう。

嘉靖五年丙戌（一五二六）十二月蘇州知府胡纘宗は、唐寅の墓石に「唐解元墓」と大書し、弟の唐申がその石を建てた。崇禎十七年甲申（一六四四）毛晋は五人の友人と野水叢薄の間に唐寅の墓所を訪れ、祠を作り、石碑を建ててその墓を修理した。さらに清の嘉慶六年辛酉（一八〇一）には唐寅の末裔唐仲冕が再び墓道を修理し、碑を理め亭を建てた。時に唐仲冕は吳県知県であった。<sup>(139)</sup>

吳県志卷三十九上第宅園林の項には、「唐解元寅の宅は桃花塢後に在り。僅かに六如古閣を存す。又桃花庵あり、改めて準提庵と為す。康熙中、巡撫宋銘重ねて修葺を加へ、乾隆中、邑令唐仲冕復び庵東の隙地を拓きて別室を為り、並びに唐・祝・文三先生を祀り、署して桃花仙館と曰ふ」とあるだけ。名所旧蹟に事欠かない蘇州の城内で、今唐寅はどんなふう眠っているのだろうか。

唐寅の人生の後半の精力は芸術完成の方向に注がれた。そしてその成果は四十七歳のころ「山路松声」軸に結実したというのが江教授の指摘である。<sup>(140)</sup> その間、三十歳から三十七歳ころ唐寅は周臣の画風を非常な努力をもって追求し、三十八歳桃花庵成立時には売画生活はすでに始まっており、新世界を開拓しつつ四十六歳ころに最高峰期を迎えたといわれる。しかしそれ以後は病氣のためか氣力の衰えが見え始めるとも江教授は述べられる。絵画芸術としての成果は沈周・文徵明と雁行するものであり、健康と長命が与えられれば、唐寅の天才は二人をはるかに凌いだであろうといわれるのである。

また書法も明代第一級の書家であることは多くの専家の説く所であるが、江教授によれば三十歳から三十六歳ころには顔真卿の書法に強く影響された書体であり、三十六歳以後は趙孟頫と李邕の線に傾くと言われる。<sup>(141)</sup> 他に米芾の風貌に似る筆法、文徵明と接近した書体もある。唐寅は生涯一つの典型を守るといふタイプの人ではなく、多くの先人の書家の優れた点を吸収し、時に応じて自ら変化していった作家であった。六如居士外集卷三には唐寅の書画に与えられた題跋や評論があるが、その大量な資料の紹介に入る余裕を持たない。

## 四　む　す　び

唐寅の三十歳までの日日が科擧のためにあつた半生だったとすれば、それから五十四歳までの後半生は、詩文書画に生命を賭けた日日であつたと言えよう。その前半は慘憺たる敗北であつたが、後半は輝かしい成就に終つた。しかし彼の意識と現実とはしばしば背反していた。彼は努力家というより、多能の天才であつた。卒業の学習でも、書画の技術でも、短時日のうちに高度な熟練に到達し得る能力を有していた。もし彼が高官か大地主の家庭に生まれ、家族の支援を長期間に亘つて受けられたら、問題なく高級官僚への道を一路邁進していただであらう。しかし、宦官の権勢の強大だった当時、また農民反乱が頻発していた政局を、そういう彼が果して正しく認識し対処できたかどうかは疑わしい。また、さらに十年二十年の健康が与えられたら、どんなに超絶した芸術境地に到達したかわからない。しかし彼は商人階級に生まれ、偏愛の性向が強く、坦夷疎曠、放誕な性格であつたから、却つて不幸と貧窮を招いたばかりでなく、健康をも害してしまつた。

このように現実生活と才能の不協和から生まれた芸術はすべていらだちと狂氣に満ちているか。それは否である。彼の絵画に対して「画法沈鬱、風骨奇峭、まことに士流の雅作、絵事の妙詣」といった評価があるように、全くそういう予想に反している。また彼の画を一見する者は、すべてその静けさと、重厚な奥深さに陶醉するであらう。ただし、彼の詩においては、不遇な人生を反映する心情を歌うものと、優しく美しくそして快樂に満ちた蘇州を謳歌するものとの両極がきわだつて見受けられる。殊に前者の感情は沈周・文徵明には乏しいものである。例えば「百忍歌」「警世」のような自戒教訓、「歎世」「自笑」「慢興」のような不遇感情の吐露、「焚香默座歌」「解惑歌」のような悟入の境地を歌うものには、もっぱら精神の拠所を模索し、儒仏道の諸教に志向するところがある。それに対して、始終美しく優しく歌われるのは蘇州の風物である。「姑蘇八詠」の絵画的美しさ、「江南四季歌」「江南送春」に歌われる自然の美しさ、「閩門即事」の繁榮と雑踏。勿論彼の貧しい桃花庵は彼の

美しい芸術的工房である。この他に、詞、散曲十三套、雜曲等の作品があるが今は論ずる余裕を持たない。彼の詩は白話を多く含み、表現も明快で通俗性に富むのである。

唐寅にとって、蘇州は郷里以上のものであった。そこにはすぐれた師友後輩が彼を快く容れかつ育ててくれた。その美しい自然と繁榮は、彼の詩画の題材を豊かにし、彼の作品の購求を頻繁にし、彼の生活を支えたのであった。

私は江兆申教授の御好意によって一九七八年三月末、士林双溪の故宮博物院において、「山居図」「高士図」両卷、「花溪漁隱図」軸、「山水人物」画冊を拝観する機会を得た。画集などでは容易に接することのできないこれらの作品は、また私の心を捕えてしばし陶酔境に導いてくれた。おそらく芸術作品の放つ芳香に包まれて発狂せんばかりの私を見て館員のかたがたも奇異の思いをされたであろう。

末尾になったが、故宮博物院書画処長江兆申教授及び同院編輯吳哲夫教授の学恩と、資料蒐集に御協力下さった台北師專吳長鵬教授、新竹師專李惠正教授に深く感謝を捧げる。

——昭和五十三年八月二十五日——

- (1) 明末馮夢竜の「唐解元一笑姻縁」(警世通言卷二十六)や、抱甕老人の「唐解元玩世出奇」(今古奇觀第三十三回)。
- (2) 袁中郎全集「叙姜陸二公同適稿」。
- (3) 蘇州府志卷三風俗。
- (4) 吳興志卷五十二風俗。
- (5) 江兆申氏「關於唐寅的研究」の年譜(以下江氏年譜と略称する)による。楊靜齋年譜(以下楊氏年譜と略称する)は六歳とする。
- (6) 唐仲冕「六如居士集叙」。
- (7) 六如居士外集「唐長民墳志」。
- (8) 祝允明「唐子畏墓誌銘」。

- (9) 吳県志卷六十六上列伝三。
- (10) 甫田集卷三十六附録文嘉撰「先君行略」。
- (11) 雅宜山人集卷十「明故承直郎応天府通判祝公行状」。
- (12) 黄魯曾「吳中故吏」。
- (13) 長洲県の人、弘治六年の進士。後に礼部左侍郎より尚書となり、南京吏部尚書に移り、乞帰した。
- (14) 江兆申氏「關於唐寅的研究」(以下江氏「研究」と略称する)三〇頁。
- (15) 江氏年譜は鑒を鑒に誤る。
- (16) 國朝献徵録卷二七無名氏撰伝。
- (17) 明史卷一九〇楊廷和伝。
- (18) 明史卷一九三費宏伝。
- (19) 明史卷二八六文苑伝。
- (20) 明史卷一九〇蔣冕伝。
- (21) 六如居士全集卷六「徐廷瑞妻吳孺人墓志銘」。
- (22) 六如居士全集卷六。唐仲冕本には諱は嘉、字は協中に作り、何大成本には諱は嘉緒、字は協中に作る。
- (23) 六如居士全集「沈隱君墓碣」には長洲人に作り、明人伝記資料索引には金陵人に作る。
- (24) 江氏「研究」十三頁。
- (25) 江氏「研究」十三頁による。
- (26) 蘇州府志卷一四二祥異。
- (27) 明史卷一八八許天錫伝。
- (28) 姚際恒「好古堂家藏書画記」。
- (29) 白氏文集第九感傷一に「白髮生一莖、朝来明鏡裏。勿言一莖少、滿頭從此始。青山方遠別、黄綬初從仕。未料容髮間、蹉跎忽如此。」
- (30) 甫田集卷一。
- (31) 甫田集卷二十一題跋「書東觀餘論後」の文末に「歲旃蒙單閼十二月廿日、從唐子畏借觀因題」と記す。
- (32) 蘇州府志卷六十一選舉三。
- (33) 祝氏集略卷二十七「夢墨亭記」。

- (34) 六如居士全集卷五「中州勝覽序」。
- (35) 吳興志卷七十一列伝孝義袁鼎。
- (36) 明史卷二八八文苑伝。
- (37) 楊氏「年譜」汪珂玉珊瑚網法書題跋卷十六。
- (38) 六如居士外集卷四。
- (39) 閻秀卿「吳郡二科志」。
- (40) 甫田集卷三六文嘉撰「先君行略」。
- (41) 明通鑑卷三十九注。
- (42) 六如居士全集所收黃魯曾「吳中故寇記」には、徐経が三・四の書題を唐寅に代作してもらいに來た。唐寅はそれが試験問題とも知らず、人にもらしてしまつた、と記している。同じく閻秀卿の「吳郡二科志」は、世間には科目を買収する人が多いのに、唐寅だけバレてしまつたのは運が悪いと嘆いている。こうした買収漏洩は当時しばしばありえたらしい。
- (43) 明通鑑卷三十九注。
- (44) 明史卷一八四傳漸伝。
- (45) 沈德符「敝帚剩語」。吳興志引列朝詩集。
- (46) 江氏「研究」四十七頁。
- (47) 江氏「研究」四十八頁。
- (48) 江氏「年譜」。プリンストン大学美術館蔵徐楨卿撰「為朱君募買璽疏」の後に唐寅が自筆した文による。
- (49) 何良俊「四友齋画論」。姜紹書「無声詩史」卷二周臣伝。
- (50) 六如居士全集卷五「与文徵明書」。
- (51) 六如居士全集書卷三。
- (52) 甫田集卷一。
- (53) 唐の元和年間の任侠の士。酒に酔つて人を殺して亡命した。後讀書して歌詩を作り、韓愈の門下となつたが、賓客との折があわず、愈の金數斤を持って去つた。
- (54) 甫田集卷一。
- (55) 何政広氏編「唐伯虎画集」雄獅圖書公司刊。



- (56) 六如居士外集卷一。
- (57) 江氏「研究」一〇三頁。
- (58) 何政広氏編「唐伯虎画集」。
- (59) 石田先生集七言律三。
- (60) 甫田集卷二。
- (61) 六如居士全集卷五。
- (62) 楊氏「年譜」張鳳翼「處実堂集」跋唐寅画王鏊出山図卷。
- (63) 式古堂書画彙考。
- (64) 江氏「研究」八十六頁。
- (65) 江氏「年譜」虚斎名画録。宋元明清書画家年表。支那名画宝鑑。
- (66) 故宮書画録卷二。
- (67) 祝氏集略卷二十七。
- (68) 故宮書画録卷六。
- (69) 宋元明清書画家年表。神州大觀卷十三。
- (70) 六如居士全集卷六「唐長民墳志」。
- (71) 楊氏「年譜」汪珂玉珊瑚網題跋。
- (72) 上三図ともすべて江氏「年譜」によるも典拠不明。
- (73) 江氏「年譜」喜竜仁画史。
- (74) 支那南画大成九卷。
- (75) 楊氏「年譜」七七頁。
- (76) 江氏「年譜」。
- (77) 虚斎名画録。
- (78) 珊瑚網題跋。
- (79) 江氏「年譜」引リチャード・エドワーズ著「石田」(The Field of Stones)
- (80) 六如居士全集卷一。
- (81) 楊氏「年譜」引王世貞弇州山人統稿。

- (82) 甫田集卷二十四。
- (83) 江氏「年譜」。過秦樓及び二犯水仙花二闕の詞は六如居士全集卷四に収められる。
- (84) 甫田集卷二十六「劉公行狀」。
- (85) 甫田集卷三十四「盧君墓表」。
- (86) 江氏「年譜」典拠不明。
- (87) 六如居士全集卷五。
- (88) 江氏「研究」二十五頁。
- (89) 楊氏「年譜」珊瑚網卷十六。
- (90) 何政広氏編「唐伯虎画集」。
- (91) 楊氏「年譜」珊瑚網題跋、王世懋「王奉常集」倦繡園跋。
- (92) 六如居士全集卷二。
- (93) 六如居士外集卷一。
- (94) 何政広氏編「唐伯虎画集」梅花。楊氏「年譜」高士奇江邨消夏錄。
- (95) 雅宜山集卷三。
- (96) 江氏「年譜」華叔和氏藏墨蹟冊。
- (97) 六如居士全集卷六。
- (98) 六如居士全集卷二。
- (99) 楊氏「年譜」珊瑚網法書題跋明人七帖。
- (100) 宋元明清書画家年表。
- (101) 江氏「年譜」喜竜仁中国画史六冊。
- (102) 楊氏「年譜」。
- (103) 六如居士全集卷六聯句。
- (104) 六如居士全集卷二。
- (105) 江氏「年譜」清錢杜松壺回憶。
- (106) 六如居士全集卷二。
- (107) 六如居士全集卷二。

- (108) 故宮書畫錄卷五。何政広氏編「唐伯虎面集」。
- (109) 明史卷一八一王鑒伝。
- (110) 吳興志卷三十九上第宅園庭。
- (111) 六如居士全集補遺。
- (112) 蘇州府志卷一四三祥異。
- (113) 江氏「研究」一〇八頁。
- (114) 何政広氏編「唐伯虎面集」。
- (115) 江氏「年譜」陳焯湘管齋寓賞編。
- (116) 江氏「年譜」盛京書畫錄。
- (117) 江氏「年譜」丁氏念聖樓藏墨蹟。
- (118) 六如居士全集卷二「正徳己卯、承沈徽徳・顧翰學置酌禪寺見招、猥鄙枯酒狼藉、作此奉謝」。
- (119) 楊氏「年譜」珊瑚網畫錄。江氏「年譜」式古堂書畫彙考。
- (120) 宋元明清書畫家年表。
- (121) 故宮書畫錄卷四。
- (122) 江氏「年譜」喜竜仁中国画史六冊。
- (123) 江氏「年譜」王士禎金陵遊記。
- (124) 江氏「年譜」喜竜仁中国画史六冊。
- (125) 楊氏「年譜」支那南画大成卷九。
- (126) 宋元明清書畫家年表。
- (127) 六如居士全集卷二。
- (128) 六如居士全集卷二。
- (129) 江氏「年譜」典拠不明。
- (130) 江氏「年譜」丁氏念聖樓藏墨蹟。
- (131) 故宮書畫錄卷四。
- (132) 謝觀編中国医学大辭典二六九六頁。商務印書館刊。
- (133) 江氏「研究」十八頁。

- (134) 江氏「研究」図版四。故宮博物院藏牧童与牛図。
- (135) 江氏「年譜」聴鳳樓書画記。
- (136) 楊氏「年譜」王季銓明清画家印鑑。
- (137) 祝氏文集卷五。
- (138) 六如居士外集卷五。
- (139) 楊氏「年譜」。
- (140) 江氏「研究」一〇七頁—一〇九頁。
- (141) 江氏「研究」九七頁—一〇〇頁。
- (142) 六如居士外集卷三王穉登丹青志。